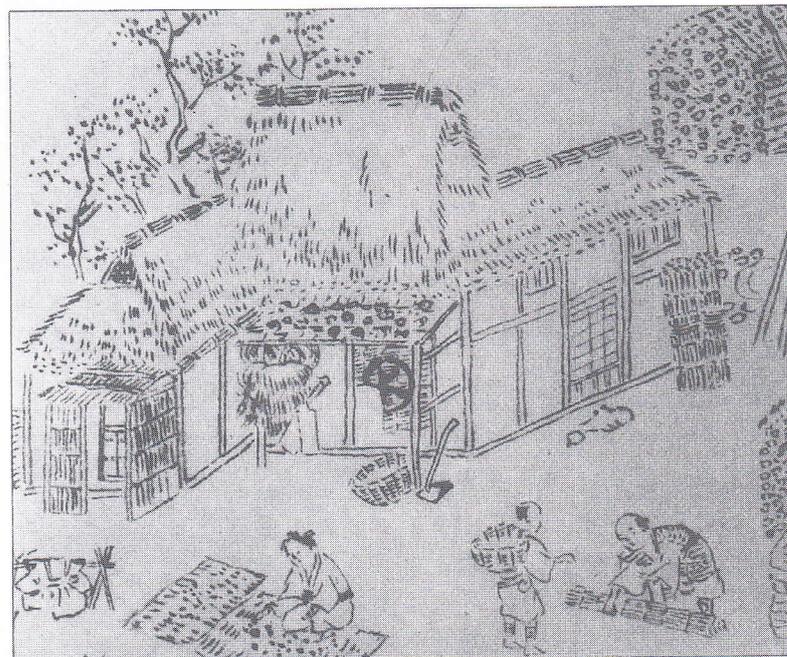


パ・ワッ
キ・ミズ
ズキリ・
●嗜好
ウス・チ
ガシイレ
ン・カンナ
キ・テシヨ
ン・タバコ
ウコロシ・

第3章
住生活用具

第3章

住生活用具



■近世の農家 「越能山都登」より

● 住生活用具 ———— 雪との闘いの日々

住居は、日常生活を維持するための拠点である。家族が寄り合いながら暮らしを立て、社会生活にも対応していく上での居城ともいえる。しかし、無雪期であれば、人々は住居を基点として昼間は外に出て生産活動に励み、日が暮ればここに戻って安息の場とするが、雪国の冬となればその様相は一変する。家族みんなが一日の大半をここで過ごすことになるし、それに加えて雪国の家屋はさまざまな用途が要求されてくるからだ。

たとえば、長い積雪期を凌ぐための食料・燃料などといった多様な生活物資の保管や、生産収穫物の格納保存

などの貯蔵庫としての役割を持たされ、家畜類の飼育施設も兼ねなくてはならない。また、限られた空間を利用して、生業に取組むための作業場としての機能も果たすことになる。要するに、冬の民家は総合的な生活・生業の施設となるのである。

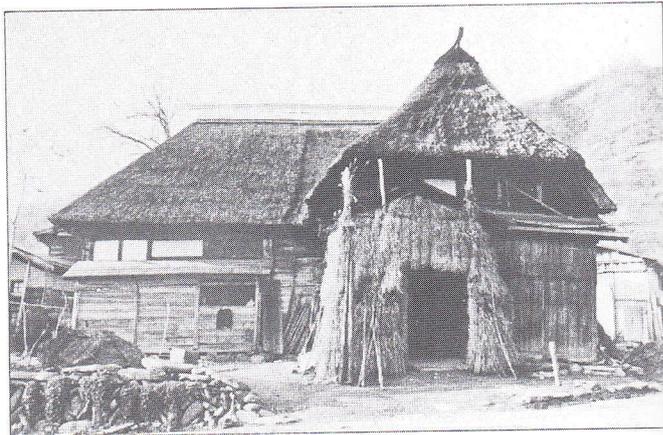
以上は冬季の家屋利用の大要だが、さらに重要なことは、この家屋という構築物を、降積んで止まない雪の重圧から、まずもって守り通さなくてはならないことである。そして、これに要する器材や機具類が、冬の住生活用具の中でも極めて重要な位置を占めるのである。

家屋の雪囲い

農家（中門造りの茅葺屋根）

茅葺民家の雪囲い風景。左手母屋から直角に出ている右手がいわゆる馬屋中門で、ここが玄関である。玄関先正面に木竿を組み、茅を搔きつけてあるのが、ユキダナと呼ばれる仮設の補助玄関である。これによって玄関が深くなり、積雪による出入りの困難さが緩和される。

母屋には浅い庇がつき、落とし板による囲いが施されている。庇の上に横長に白く見えるのは天窓で、明りとり用である。右ページに並ぶ写真は旧来からの戸口の囲いで、斜めに立掛けた木竿に横木を渡し、それに柴木を粗い糞の子状に編みつけてある。



町場（板葺・トタン屋根）

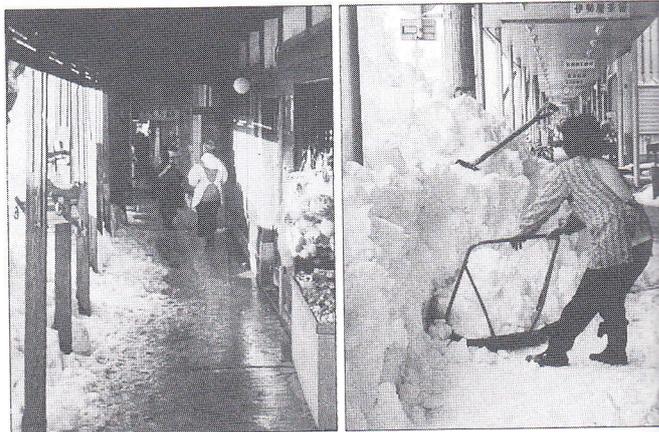
この写真に見える格子状のものも玄関先に仮設したユキダナだが、町場（市街地）は家が立て込んでいて、杉の木の背板で組んである。家も木羽葺が多く、茅葺根の家と違って戸口も広くなり、囲いは落とし板が主流になる。次ページ写真の家は広い間口全部をそれで囲っている。右端の落とし板は鉤状の金具に板を掛ける新型のもので、主として腰高窓に用いる。スダレを吊したのも見えるが、吹込む雪を防ぐためである。木羽屋根がトタン葺になると、滑り落ちる雪を止めるために、金具に横木を渡す。これがナデドメである。



雁木通りとアーケード

雁木通りは、現在のアーケードの前身といえる屋根のついた歩道で、商店街に多く見られた。店の前は、広く開けられ人通りも多いことが望ましい。そこで、各商店が付出した庇を横につないで、下を通路とした。

冬の降雪時には屋根付きの無雪歩道となるので、雪国特有の景観ともなった。しかし前面の道路に雪を高く積むと道路が暗くなるので、雁木先端の上部に横長の明り通りの障子をつけた。また、向う側の雁木通りへ行くため道路の雪山の所どころにトンネルを作って行き来したが、道路除雪とアーケード設置が進みこの景観は消えた。



イ 防風雪用具

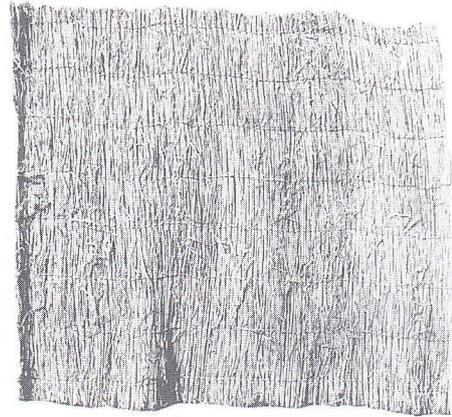
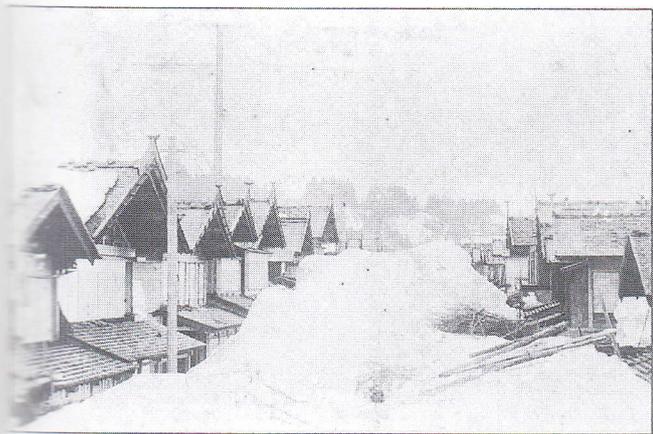
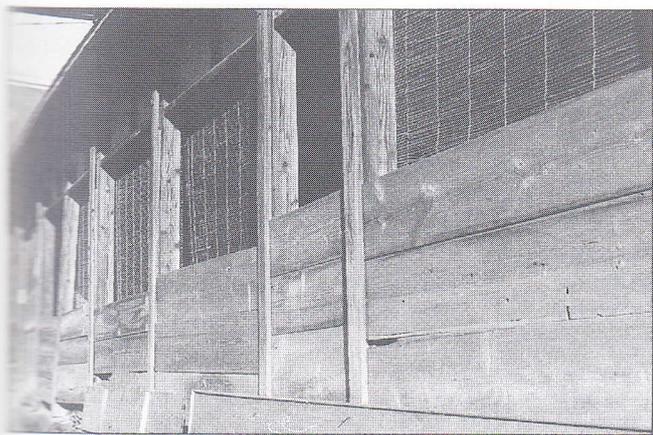
雪国の越冬態勢は、生活物資の確保と風雪への備えが第一の要件であった。そして、その風雪に対処する方途は当地方の俚言でいう「雪囲い」と「雪掘り」であって、要するに風雪への備えと降積んだ雪の処理である。

雪囲いは、住居だけでなく、公共的な施設や庭木などの樹、養鯉池などにも施すが、主とした目的は積雪の重圧による倒壊や破損などからそれらを守ることである。

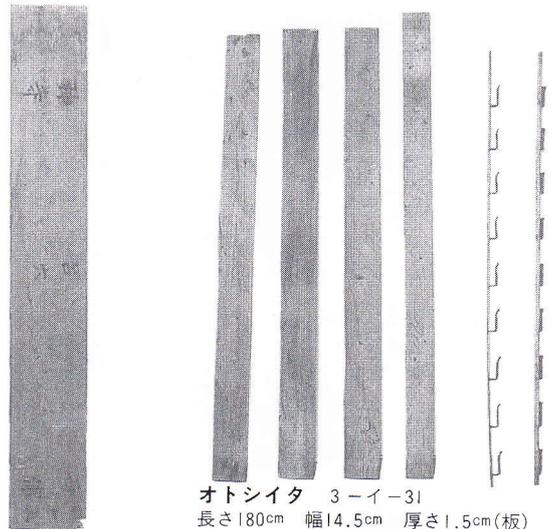
住居の場合は、それに加えて日常生活を守るための意味が重要視される。したがって、家の出入口や戸口が降積む雪や屋根から掘落とした雪で埋まることへの備えに

重点が置かれる。旧来の民家では、戸口の数は極めて少なく、たとえば火災などの非常事態にはそこが脱出口となり、また、電灯の普及するまでは、昼なお暗い室内の明りとりとしての障子を塞ぐことはできない。したがって、戸口の囲いは本来適当な間隔をおくべきものであった。後に簡便な落し板を用いるようになって、緊急時に備えて非常口としての工夫が施されていた。

玄関口は日常の出入りが必須なので、ユキダレ（茅簀）などで降込む雪を防ぐとともに、玄関先にユキダナ（かやす）などで降込む雪を防ぐとともに、玄関先にユキダナという補助玄関を組んで仮設するのが普通であった。



ユキダレ 3-イ-4
長さ182cm 幅184.5cm
茅簀 雪囲い用

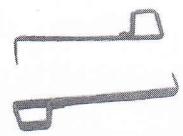


オトシイタ 3-イ-31
長さ180cm 幅14.5cm 厚さ1.5cm(板)
長さ174.2cm 幅1.9cm 厚さ4.4cm(金具)
杉・鉄 戸口囲い用

オトシイタ 3-イ-29
164cm×24cm 厚さ2cm
杉 戸口囲い用



ナデドメ 3-イ-39
長さ38.5cm
鉄 金具



ナデドメ 3-イ-41
長さ28.8cm
鉄 金具

◀雁木通り(左)、アーケード通り(中央)、明治時代の本町通り(右)

イ 防風雪用具

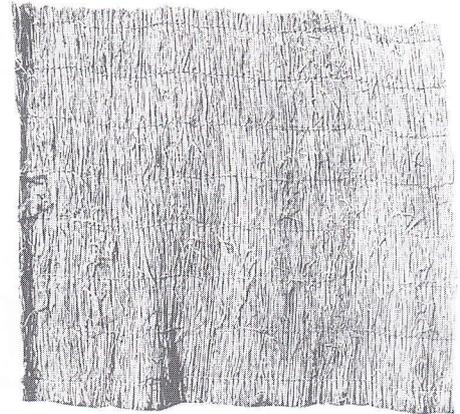
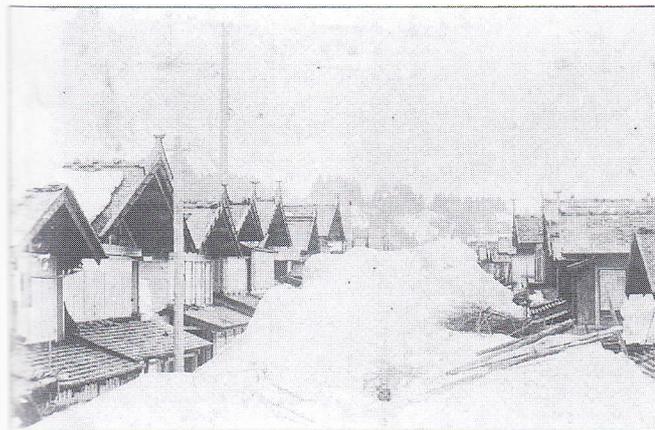
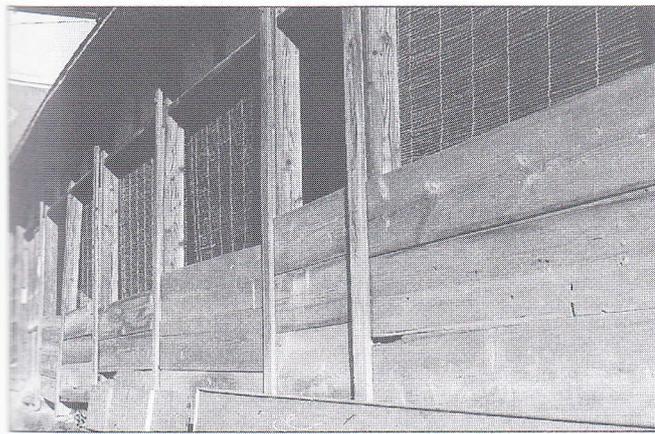
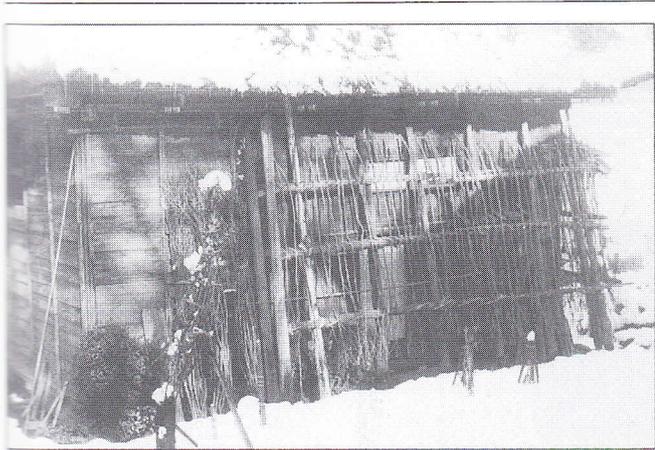
雪国の越冬態勢は、生活物資の確保と風雪への備えが第一の要件であった。そして、その風雪に対処する方途は当地方の俚言でいう「雪囲い」と「雪掘り」であって、要するに風雪への備えと降積んだ雪の処理である。

雪囲いは、住居だけでなく、公共的な施設や庭木などの樹、養鯉池などにも施すが、主とした目的は積雪の重圧による倒壊や破損などからそれらを守ることである。

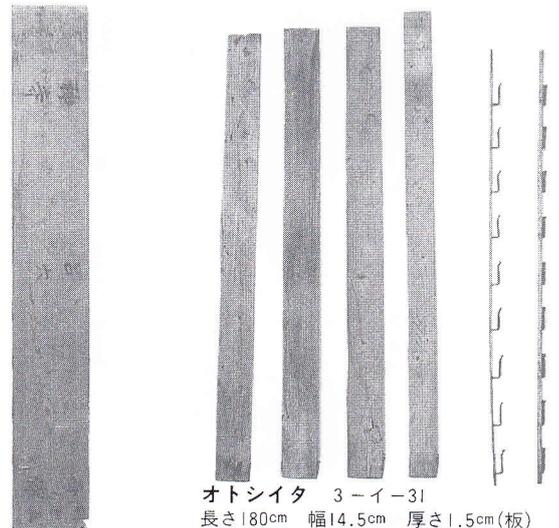
住居の場合は、それに加えて日常生活を守るための意味が重要視される。したがって、家の出入口や戸口が降積む雪や屋根から掘落とした雪で埋まることへの備えに

重点が置かれる。旧来の民家では、戸口の数は極めて少なく、たとえば火災などの非常事態にはそこが脱出口となり、また、電灯の普及するまでは、昼なお暗い室内の明りとりとしての障子を塞ぐことはできない。したがって、戸口の囲いは本来適当な間隔をおくべきものであった。後に簡便な落し板を用いるようになって、緊急時に備えて非常口としての工夫が施されていた。

玄関口は日常の出入りが必須なので、ユキダレ（茅簀）などで降込む雪を防ぐとともに、玄関先にユキダナという補助玄関を組んで仮設するのが普通であった。

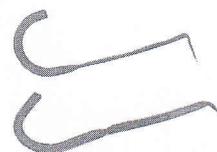


ユキダレ 3-イ-4
長さ182cm 幅184.5cm
茅簀 雪囲い用



オトシイタ 3-イ-29
164cm×24cm 厚さ2cm
杉 戸口囲い用

オトシイタ 3-イ-31
長さ180cm 幅14.5cm 厚さ1.5cm(板)
長さ174.2cm 幅1.9cm 厚さ4.4cm(金具)
杉・鉄 戸口囲い用



ナデドメ 3-イ-39
長さ38.5cm
鉄 金具



ナデドメ 3-イ-41
長さ28.8cm
鉄 金具

◀雁木通り(左)、アーケード通り(中央)、明治時代の本町通り(右)



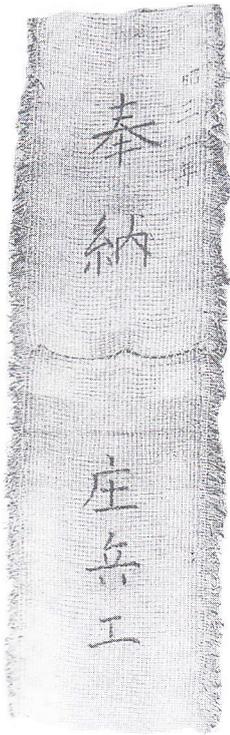
■山門の囲い (市内神宮寺)



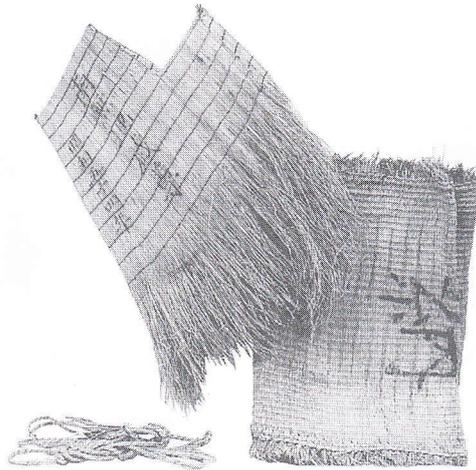
■地藏様の囲い



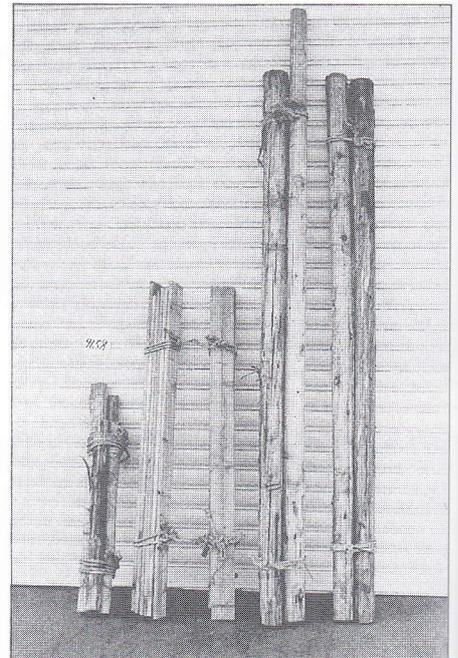
■鳥居の囲い



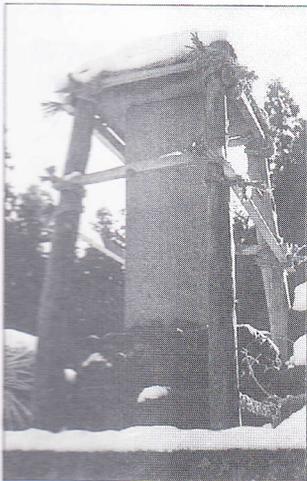
カコイムシロ 3-イ-8
長さ370cm 幅107cm
葉 社寺囲い用



ジゾウサマノカコイ 3-イ-27
長さ103cm(スゲボシ)
長さ265cm(ムシロ)
菅・藁 地藏石像囲い用



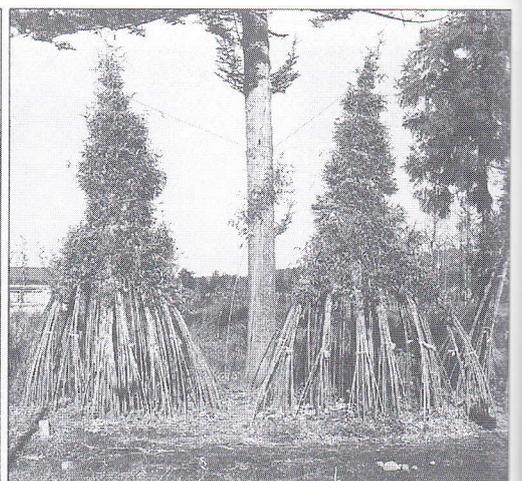
カコイギ 3-イ-32
最長240cm 最小85cm
杉 庭木囲い



■石碑の囲い



■庭木の囲い



■竹の囲い

ロ 除雪用具

除雪用具の項の内容は、雪掘り用具と雪処理用具に大別される。雪国の冬の生活において、この除雪作業は、少なくとも住居を維持する上で欠くことのできない日常的な仕事である。除雪用具はその意味では、まさに雪との闘いの兵器といえるものであった。それにもかかわらず、除雪用具及び除雪作業の実態は、近年に至るまで大きな改良・進歩のあとが見えないのが実情であった。

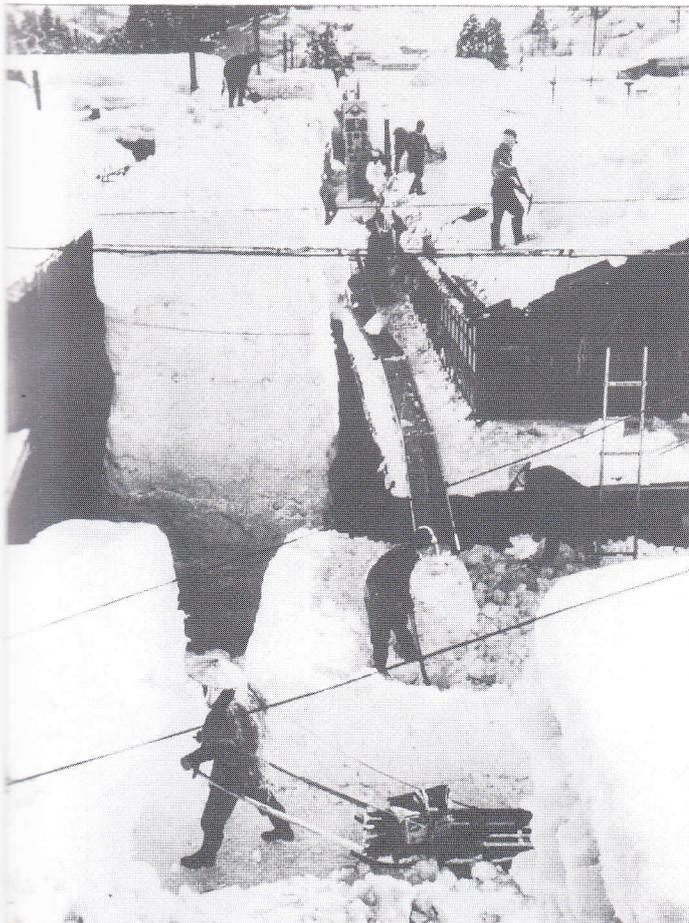
除雪という言葉は、当地方の人々にとっては屋根雪をおろす「雪掘り」と同意語のように受けとられていた。そのことが最大の関心事であり、自力による限られた雪

対策だったからである。しかし実際には、掘落した雪を除去しなくては次の作業に進み得なかったのだから、雪掘りと雪処理は一体の仕事として扱われていた。事実、用具もまた相互に深く関連していたのである。

また、それとは別に雪処理は、たとえば降る雪を融かすための流水利用、固く締まった雪や凍結した雪の処置、春先の田畑の消雪、道路や校庭の地面を出すための雪割りなどに見られた。ただそれは、すべて人手による外なく、最近に至って機動力除雪が導入されるまでの雪処理は、雪掘りの一環として行うよりなかったのである。



■茅葺屋根の家の雪掘り



■市街地での雪掘り

雪掘り支度



雪掘りの手順

当地方の民家の屋根の構造は、茅屋根と板屋根に大別されるが、それによって雪掘りの手順が違っていた。それは、屋根形による荷重の違いからであった。

茅屋根（クズヤという）は急傾斜の三角形であるが、まず頂上部のグシ（棟木）に積もった雪を除き、そのあと上から屋根を回りながら下に向かって掘り進む。

板屋根（木羽・トタンなど）は、現在一般に見られる形式で、傾斜は茅屋根に比べて極めて緩い。この屋根の場合は、軒先部分から先におろしはじめ、やはり屋根を回りながら平均に上に進み、グシを掘って終わる。

① 雪掘り用具

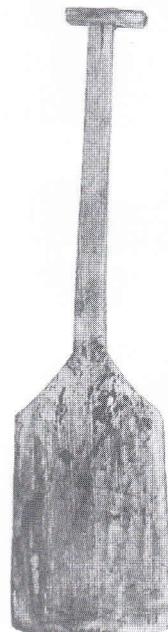
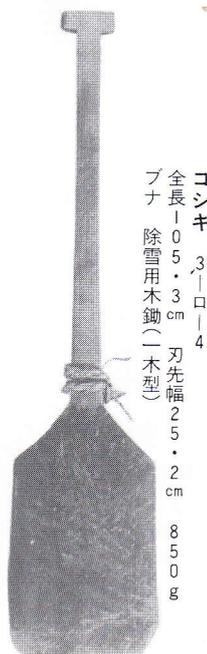
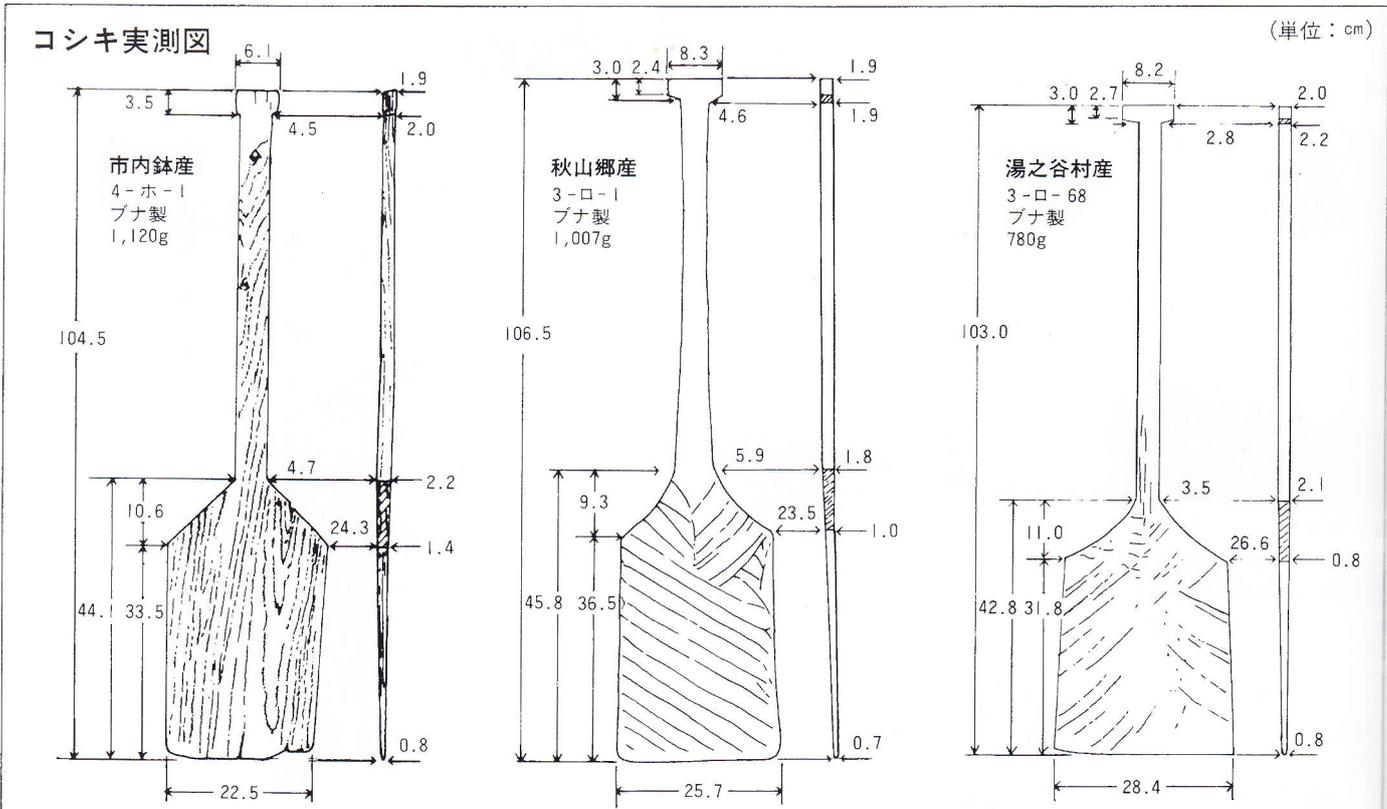
「…家として雪を掘るはなし。掘るには木にて作りたる鋤を用ひ、里言にやこすきといふ、則木鋤也。櫛といふ木をもつて作る、木質軽強して折る事なく且軽し、…雪中第一の用具なれば、山中の人これを作りて里に売、家毎に貯るはなし。…」(『北越雪譜』より)

コシキ(コスキ)が古くから唯一の除雪用具であったことが知られる。コシキの生産地として著名なのは、北魚沼郡の湯之谷や、秋山郷などで、湯之谷ゴシキ・秋山ゴシキなどの呼び方があり、形にも違いが見られる。ま

た自製して用いた人もあり、十日町周辺の木工職人などには、これを作って節季市で売る人もあった。

大正中期ごろから鉄刃のシャベルが電気工事などの影響で用いられるが、昭和40年代ごろ軽金属製のスコップが出回るまで、コシキが雪掘り用具の主流の座にあった。

十日町市街地のような家の立込んでいる所での雪掘りは、その雪の始末を併行しなくてはならず、そのためにさまざまな工夫があり、用具も考案されたが、中でも有効だったのはユキドヨ(雪樋)であった。また、昭和50年代に普及したスノーダンプは、いま広く使われている。



コシキ 3-10-33
 全長121.5 cm 刃先幅29 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 1,600 g



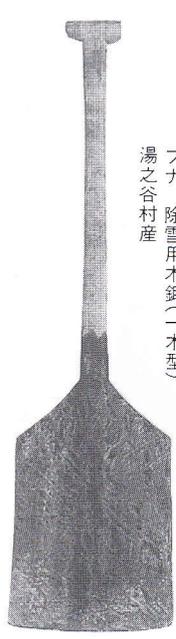
コシキ 3-10-32
 全長117.8 cm 刃先幅27.7 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 1,530 g



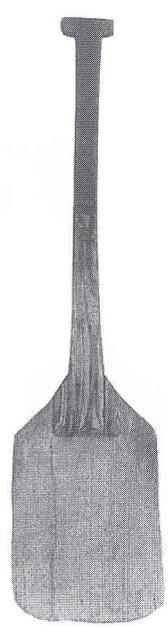
コシキ 3-10-25
 全長94.2 cm 刃先幅26 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 745 g



コシキ 3-10-27
 全長100 cm 刃先幅27.8 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 958 g
 湯之谷村産



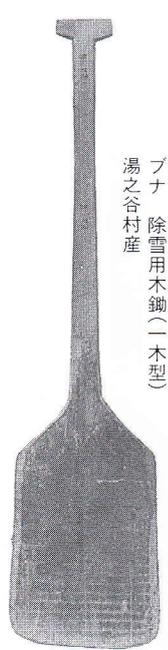
コシキ 3-10-42
 全長100 cm 刃先幅24 cm
 ブナ(補修部分杉材) 除雪用木鋤(一木型) 970 g



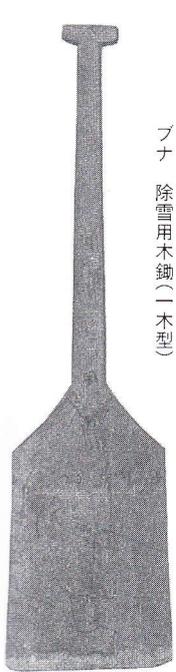
コシキ 3-10-41
 全長106 cm 刃先幅25.2 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 1,100 g



コシキ 3-10-37
 全長103.7 cm 刃先幅25 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 820 g
 湯之谷村産



コシキ 3-10-34
 全長103.8 cm 刃先幅27 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 1,050 g



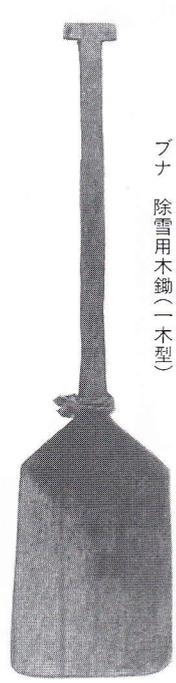
コシキ 3-10-53
 全長95.6 cm 刃先幅24.7 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 633 g



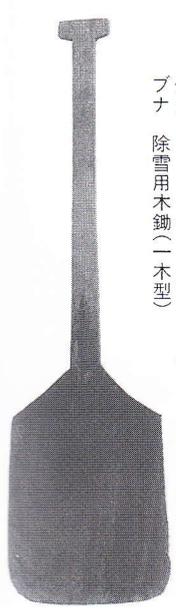
コシキ 3-10-51
 全長106.3 cm 刃先幅26.1 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 1,047 g



コシキ 3-10-47
 全長110 cm 刃先幅26.2 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 1,300 g



コシキ 3-10-45
 全長100.5 cm 刃先幅28 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 715 g



コシキ 3-10-11
 全長93.5 cm 刃先幅23.5 cm
 ブナ 除雪用木鋤(一木型) 777 g

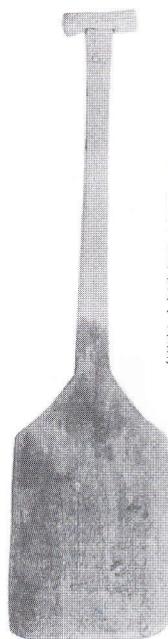
など
 の影
 コップ
 あった。
 雪掘り
 ために
 でも有
 和50年
 いる。

(cm)
 0
 2

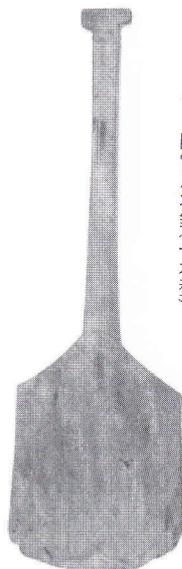
2.1
 0.8

0.8

コシキ 3 | 10 | 97
 全長 97.7 cm 刃先幅 24.9 cm
 ブナ 除雪用木鋤(木型) 1,075 g



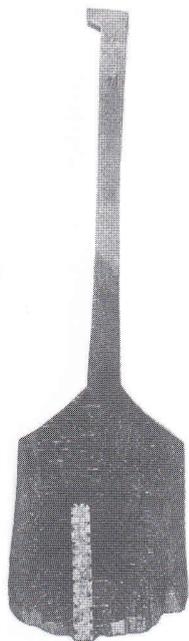
コシキ 3 | 10 | 73
 全長 95.4 cm 刃先幅 29 cm
 ブナ 除雪用木鋤(木型) 950 g



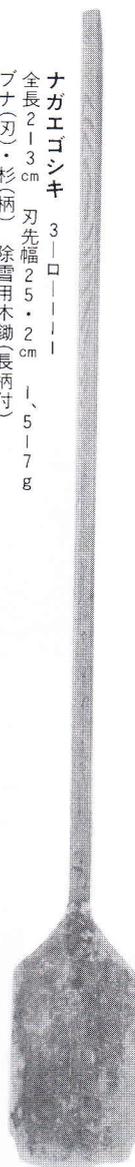
コシキ 3 | 10 | 68
 全長 103 cm 刃先幅 28.4 cm
 ブナ 除雪用木鋤(木型)
 湯之谷村産 780 g



コシキ 3 | 10 | 65
 全長 98.5 cm 刃先幅 27.1 cm
 ブナ(補修部トタン) 除雪用木鋤(木型) 688 g



ナガエゴシキ 3 | 10 | 111
 全長 213 cm 刃先幅 25.2 cm
 ブナ(刃)・杉(柄) 除雪用木鋤(長柄付) 1,517 g



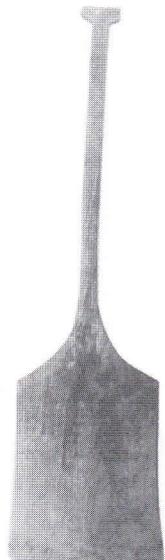
コシキ 3 | 10 | 108
 全長 107.5 cm 刃先幅 26 cm
 ブナ 除雪用木鋤(半製品) 2,150 g



コシキ 3 | 10 | 98
 全長 105 cm 790 g
 ブナ 除雪用木鋤(木型)
 湯之谷村産



コシキ 3 | 10 | 95
 全長 98 cm 刃先幅 26 cm
 クリ 除雪用木鋤(木型) 785 g



ナカエゴシキ 3 | 10 | 110
 全長 135.8 cm 刃先幅 21.3 cm
 ブナ 除雪用木鋤(長柄付) 860 g



シャボリ 3 | 10 | 114
 全長 97.8 cm 刃幅 23 cm
 鉄 除雪用スコップ 1,430 g



カクシャボリ 3 | 10 | 116
 全長 103 cm 刃先幅 24.5 cm
 鉄 除雪用スコップ(四角型) 1,930 g



コシキ 3 | 10 | 100
 全長 118.5 cm 刃先幅 26.5 cm
 ブナ 除雪用木鋤(組立型) 1,068 g



② 雪処理用具

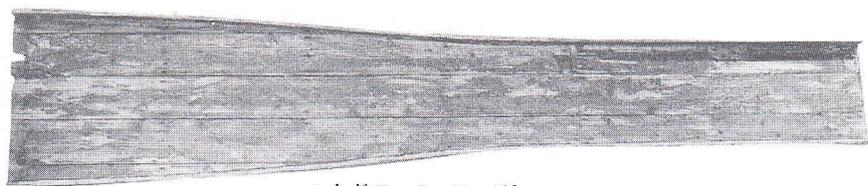
雪処理というのは、生活や作業に邪魔になる雪を取除くことで、雪片付けである。雪片付けは、雪掘りには必ず付随することであり、コシキ・スコップなどは処理用具でもある。前に書いたユキドヨ（雪樋）は昭和初年ごろから雪掘り時に用いたが、市街地の家混みの所では、雪をこれに乗せて滑らせ、遠くへ運べるので便利である。それ以前は、やり場のない雪を肥箆で背負ったり、雪串で突刺して担いで運んで捨てた。屋根からおろして軒端に積上げた雪の処理も、以前は専らコシキなどによって

いたが、近年、いわゆるスノウダンプという手押し除雪具が普及した。これは、板屋根（木羽・トタン屋根など）の雪掘りにも多く使用される。春めいて、雪が固くになるとコシキなどでは歯がたたなくなるので、ユキキリノコギリで四角に切取って運ぶこともした。また、融けた雪が凍ると、マサカリ・トウグワ・カナゴシキなど鉄刃のついた用具を使用することもある。

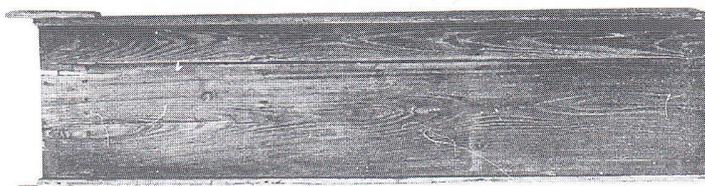
降雪のさかんな時季、流れ水で消雪することもあるが、路面などでその流路を誘導するために、藁束のマッコを作って置くこともある。



ハシゴ 3-ロー-128
長さ496cm 幅46.5cm
杉 屋根除雪昇降用 三間梯子



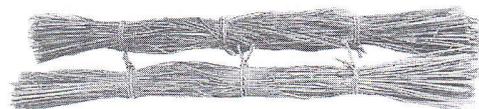
ユキドヨ 3-ロー-123
長さ364cm 最大幅73.4cm
杉 屋根雪等排雪用樋(滑り台型)



ユキドヨ 3-ロー-124
長さ182cm 幅45cm
杉 屋根雪等排雪用樋(滑り台型)



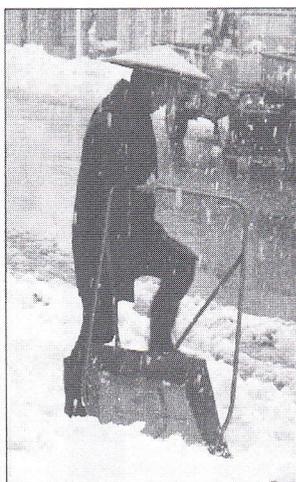
スノウダンプ 3-ロー-126
全長118cm 幅63.2cm 9,000g
鉄 除雪・排雪用(手押し型)



マッコ 3-ロー-129
長さ97cm
藁 消雪用流水誘導用



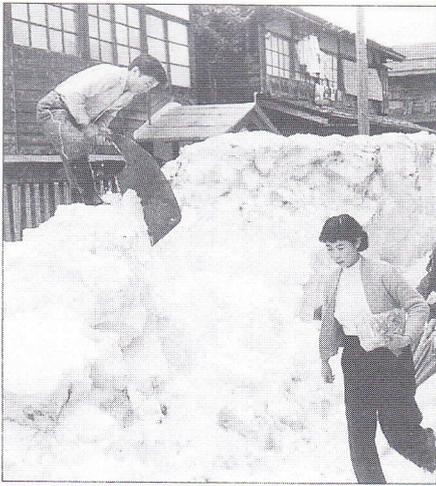
■ユキドヨを連結させ屋根雪を排雪



■スノウダンプで除雪



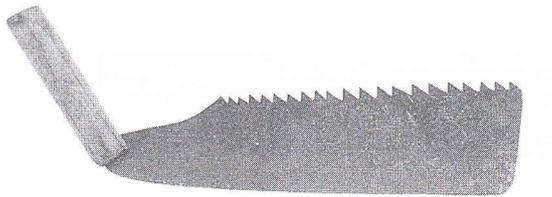
■マッコを使用した流水の進路調節



■ユキキリノコギリで雪を切るようす

■コエカゴでの排雪

■ユキグシでの排雪



ユキキリノコギリ 3-ロ-137
全長78cm 1,530g
鉄・桐(柄) 凍結雪処理用鋸



ユキキリノコギリ 3-ロ-143
全長72cm 1,376g
鉄・桐(柄) 凍結雪処理用鋸



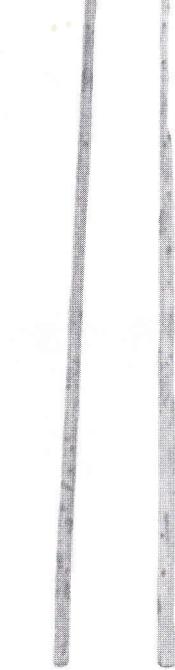
ユキキリノコギリ 3-ロ-145
全長52.6cm 1,070g
鉄・木(柄) 凍結雪処理用鋸



カナゴシキ 3-ロ-130
全長108cm 刃先幅12.8cm 2,200g
鉄・木(柄) 凍結雪処理用鉄刃付鋤



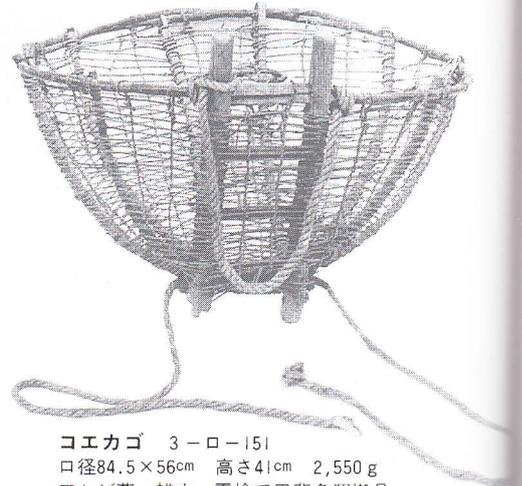
カナゴシキ 3-ロ-132
全長97.2cm 刃先幅11.6cm 2,230g
鉄・木(柄) 凍結雪処理用鉄刃付鋤



ユキグシ 3-ロ-152
長さ190cm 1,155g(右)
杉 雪捨て・運搬用串竿



カナゴシキ 3-ロ-134
全長120cm 刃先幅10.9cm 1,070g
鉄・ブナ(柄) 凍結雪処理用鉄刃付鋤



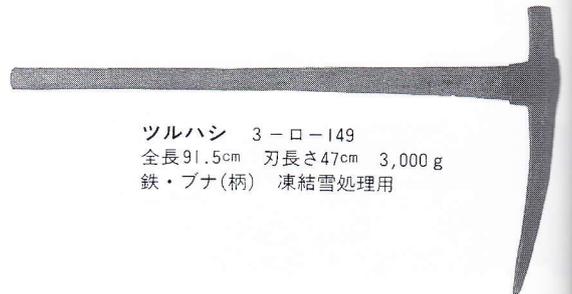
コエカゴ 3-ロ-151
口径84.5×56cm 高さ41cm 2,550g
アケビ蔓・雑木 雪捨て用背負運搬具



マサカリ 3-ロ-150
全長90cm 刃長さ24cm 3,000g
鉄・ブナ(柄) 凍結雪処理用



トウグワ 3-ロ-148
全長91.5cm 刃長さ23.5cm 2,000g
鉄・ブナ(柄) 凍結雪処理用



ツルハシ 3-ロ-149
全長91.5cm 刃長さ47cm 3,000g
鉄・ブナ(柄) 凍結雪処理用

④ イロリ (ジロ) 用具

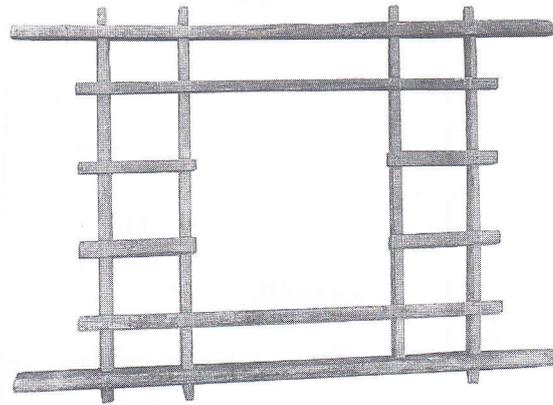
イロリは住居生活の中心であった。家族たちが火を囲んでざんらんする安息の場であり、客を迎えて談笑する社会との接点でもある。イロリはまた、食事を煮炊きし調理する所であり、その周りは食事の場であり、殊に冬季は、さまざまな生産活動の場（仕事場）ともなった。

寒い夜、イロリの火は唯一の明りであったし、寒さの折には採暖用として大きな役割を果たしたのである。

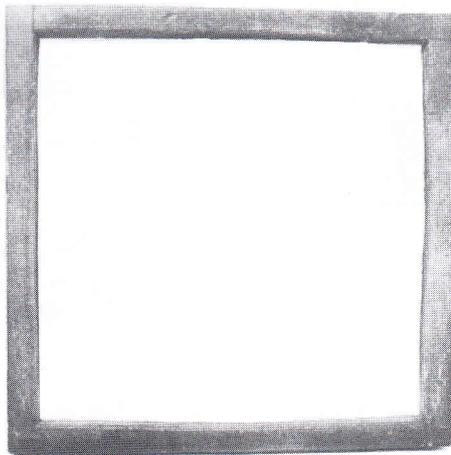
イロリの構造と道具だてを見ると、地面を四角に囲込み、それを木材で組んだ炉縁で囲み、その中央のホド（火

所）で火を焚く。上の中央からジロカギ（自在鉤など）を吊して、これに煮炊きする鍋などを掛ける。上部の中段には格子状に作った火棚を吊す。また、イロリのある部屋の一隅を薪置場として囲い、キジリと呼んだ。

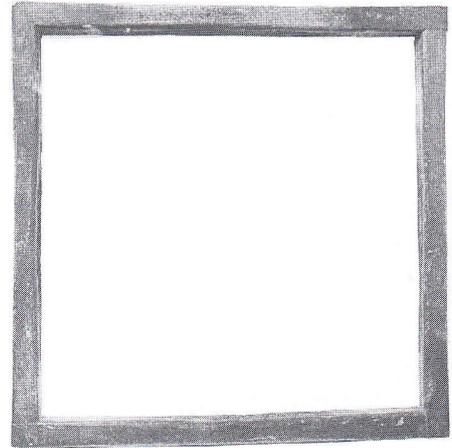
右の写真に見える格子状のジロ枠は、幼児の転落防止用に考案した板の設備である。カマドは日常の煮炊きに用いることは少なかったが、時には作って用いる家もあった。クドなどと呼ぶ土で築いた大型のカマドはあったが、これは特別の場合に用いるものであった。薪ストーブは、戦後、焚火の煙を厭って用いるようになった。



ヒダナ 3-ハ-11
170.5cm×111cm
杉 イロリ上に吊す火棚

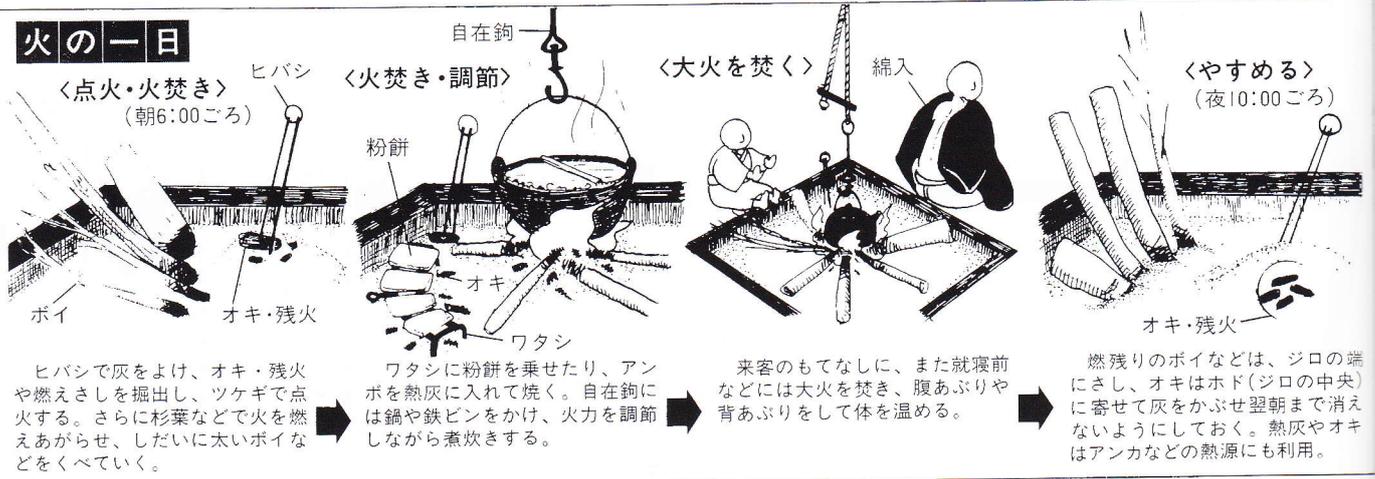


ロエン 3-ハ-13
枠105cm×106cm 太さ6.4cm
サワラ 炉縁

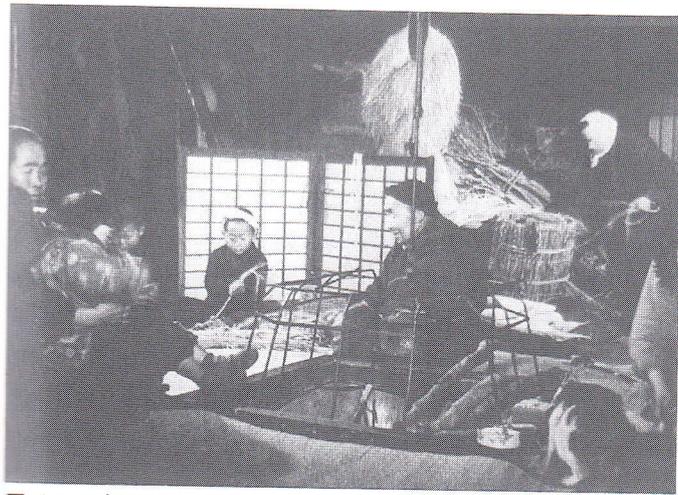


ロエン 3-ハ-15
枠104.5cm×104cm 太さ7.6cm
スモモ 炉縁

火の一日



など)
 の中
 のある
 防止
 破きに
 破もあ
 った
 破り
 。



■イロリ(ジロ)を囲んだひととき



■ボイのとり入れ



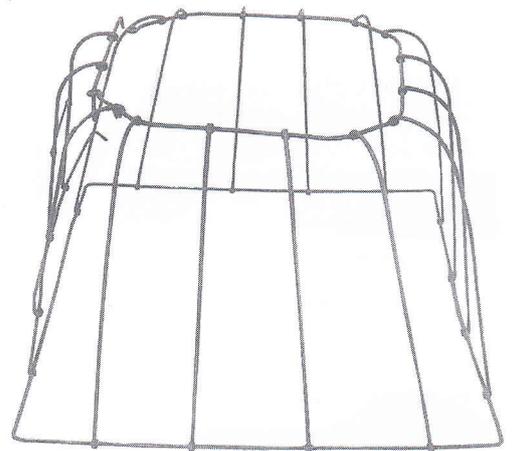
ジザイカギ 3-ハ-2
 長さ38.8cm 鈎付40cm 縄135cm
 鉄・木・藁縄 イロリの上に吊す鈎



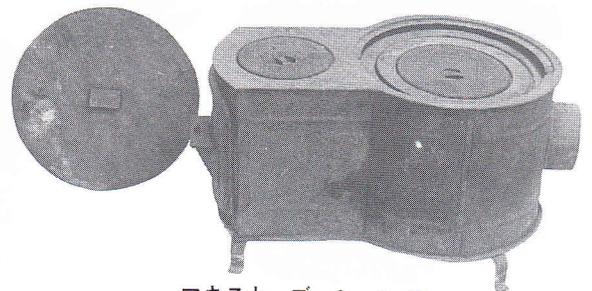
ジザイカギ 3-ハ-6
 全長165cm
 鉄・木 イロリの上に吊す鈎



ジザイカギ 3-ハ-7
 全長129.4cm
 鉄 イロリの上に吊す鈎



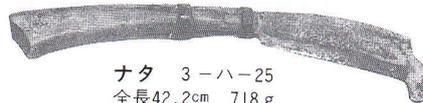
ジロワク 3-ハ-19
 枠下80.5cm 高さ52.3cm
 鉄 危険防止枠



マキストーブ 3-ハ-23
 62.2cm×32cm 高さ30.3cm
 鉄 イロリ用



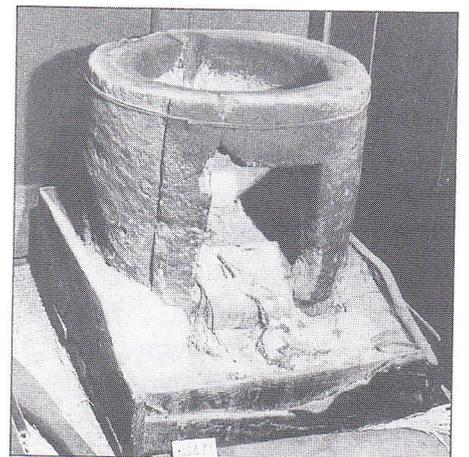
キシリ 3-ハ-21
 100cm×100.5cm 高さ72cm
 杉 薪置場用囲い具



ナタ 3-ハ-25
 全長42.2cm 718g
 鉄・木(柄) 柴切断用鉞



マキキリダイ 3-ハ-24
 径16cm×14.5cm 高さ11cm
 杉 柴切断用台



カマド 3-ハ-22
 径49cm 高さ33cm
 石 カマド

ジロの端
 の中央)
 まで消え
 灰やオキ
 用。

② 点火・火焚き用具

マッチ・ライターなどといった簡便な発火具が普及するまで専ら用いられたのは、火打道具であった。

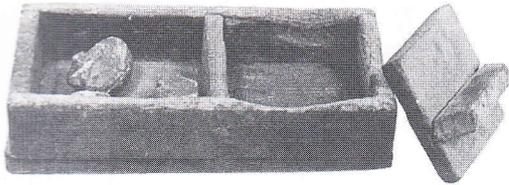
下の写真の火打箱は、その一式、火打石・火打金・ホクチを取揃えて入れ、常備していたものである。その手順は、火打石に鋼鉄製の火打金を打ちつけて火花を出し、炭粉のホクチに落して点火する。終って消すときはホクチの上に落し蓋をする。

付木は、薄い木片に硫黄を付けたもので、炭火などを火種にする際に用いた。これは、点火したホクチの火を

燃え立たせる時にも便利なものであった。

火吹竹は、一方を口にくわえて吹き、先端の細い穴から風を送って炭火から薪に焚きつける用具で、炉端や風呂の火を焚くときの必信用具であった。

火箸は、燃えて炭火になったオキを扱うような時に無くしてはならない用具で、特に限られた場所で焚くイロリでは是非とも必要であったから、どこの家のイロリにも幾ゼン（組、箸同様に二本で一对）が置かれていた。鉄製火箸の普及する以前は、木の枝で作って用いていた。



ヒウチバコ 3-ハ-26
22.8cm×11.4cm 高さ5.5cm
杉 火打道具格納箱



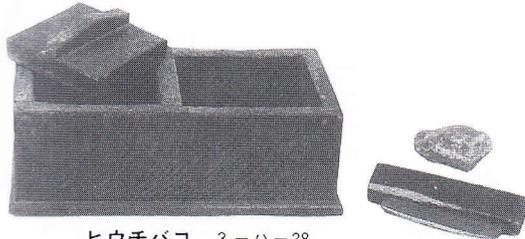
ツケギ 3-ハ-35
12cm×3cm 厚さ0.05cm(1枚)
松・硫黄 点火用



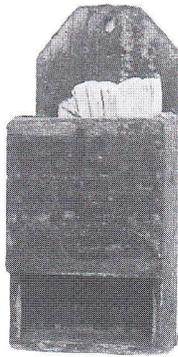
ヒバシ 3-ハ-46
長さ61cm 80g
タニウツギ 火箸



ヒバシ 3-ハ-47
長さ40.6cm 118g
鉄 火箸



ヒウチバコ 3-ハ-28
23.8cm×12cm 高さ8.6cm
杉 火打道具格納箱



ツケギバコ 3-ハ-44
全長23.3cm 幅10.5cm
杉 付木常備用箱



ヒフキダケ 3-ハ-55
長さ53.5cm 径2.6cm 135g
竹 火熾し用具



ヒウチガネ 3-ハ-30
長さ12.3cm
鋼 火打金



ケシツボ 3-ハ-64
高さ23.8cm 径30.4cm
陶器(素焼) 火消壺



ケシツボ 3-ハ-68
径21.8cm 高さ21cm
鉄 火消壺

火と生活

火は、日々の生活において、一日として欠かせないものであった。そしてそれは、すべて焚火によって得た。

人間は太古から火山の噴火や山火事などで火を見ていたが、それは恐ろしい魔物であり、また神の司るものであった。その火から焚火をすることを覚え、さらに住居内に取入れ、暮らしを営むための熱源・光源として利用するとともに、これによる加工技術も発見したのである。

はじめ、自然の火を移して焚火をしていたが、やがて自ら発火することを発見して適宜使用できるようになるが、それはかなりの技術を要したと思われる。そのため、

次に用いるための火種を残すことが重視され、それは一家の主婦の重要な役割とされていた。

火は、神聖なものであるとともに、扱いを誤ると魔性のものとなって災害をもたらす。だから、家で火を焚くイロリは清浄な所であり、火を穢す行為は固く禁じられていた。たとえば、「爪や毛髪を燃やすと気が狂う」などと言聞かせたし、薪以外のものを焚くことも嫌った。また、正月などには特にここを清浄にして、苗代や田んぼに見たてたさまざまな禁忌があり、予祝行事としての作占いや天気占いなどが行われた。

③ 温石類

寒い冬、寝床の中の足元などに保温器具を入れることは現在でも行われているが、家の暖房も行届かないころは、そうした器材の入手もままならず、前にも書いたように病人などで急に必要な時には、大根を火に焙^{あぶ}つて、それを用いたりもした。そうした暮らしの中で古くから用いたのは温石であり、あるいはアンコウと呼ぶ小型土製のアンカ^{あんか}の一種であった。

温石は、手ごろな石を火で温め、それを布切れに包んで用いた。温石には特にそれ用に作ったものも希にはあ

るが、大方は角の無い自然石で、大小もさまざまだが、小型のものは懐炉^{かいろう}としても利用した。

湯タンポは熱湯を入れて布に包んで使う保温容器で、古くは陶製であったが、昭和初年ごろから鉄板(ブリキ)製のものが出回って、一般に使われるようになった。

アンコウは、熱灰などを入れて用いるものだが、戦時中の物資不足のころ、ブリキの空缶に細かく穴をあけて藁灰を入れ、その中に熱灰や灰火を入れる手製のアンカを作って使う人があった。後にその応用とも見られる、いわゆる豆炭^{まめたん}アンカが市販され、広く使われた。



オンジャク 3-ハー-69
18cm×13.5cm 2,840g
木綿布125cm×120cm
自然石 温石(保温用)



オンジャク 3-ハー-71
4.2cm×4.2cm 高さ1cm 25g
自然石 温石(保温用)



オンジャク 3-ハー-72
8.8cm×8.4cm 高さ2.7cm 340g
自然石 温石(保温用)



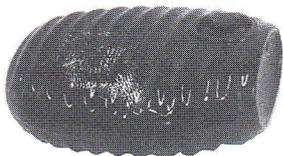
ユタンポ 3-ハー-81
長さ24.6cm 幅13.5cm 高さ11.2cm
陶器 就寝時保温用



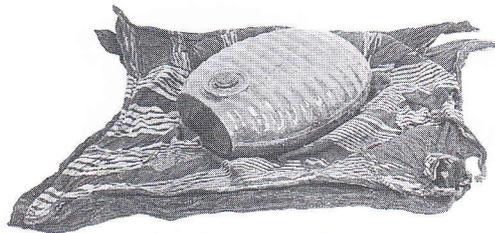
ユタンポ 3-ハー-83
長さ28.3cm 幅13.5cm 高さ13.1cm
陶器 就寝時保温用



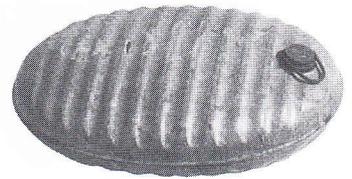
ユタンポ 3-ハー-84
長さ26cm 幅14.5cm 高さ14cm
陶器 就寝時保温用



ユタンポ 3-ハー-80
長さ24.7cm 幅22cm 高さ11cm
陶器 就寝時保温用



ユタンポ 3-ハー-77
長さ24.2cm 幅21.3cm 高さ10cm
木綿布57cm×65cm
陶器 就寝時保温用



ユタンポ 3-ハー-93
長さ31.5cm 幅23cm 高さ10cm
鉄 就寝時保温用

薪の燃料

スギツパ——杉の木の枯葉。落ちたものを拾って焚く。よく燃えるがすぐ灰になるので、焚きつけ用に使用した。
ホトラ——芽生えて1~2年の雑木若木。周囲に伸びた雑草も一緒に刈り、乾燥しておいて薪の補充用に焚く。
ワラ——稲藁。薪不足の所ではホトラと同じように用いた。すぐ燃えつきるので常に補充しなくてはならない。
ポイ——柴の俚言。春または秋に伐採し束ねて積んでおき、春に雪上を櫓で家へ運ぶ。最も普通に焚かれた薪。
コロ——ブナ・ナラなどの成木を伐採して玉切ったもの。小割りして焚くことが多く、これをワツツアバなどとも

呼ぶ。火力も火持ちも良いが、交易品として高価になるので、特別の場合のみ使用する家が多かった。
スミ——木炭。炭火を熾^{おこ}して火鉢・炬燵・コンロなどで用いた。購入品なので普段は焚き落しで間に合せた。
アブラ——油。以前は専ら灯火用で、煮炊き・暖房には用いなかった。エゴマ油・ナタネ油はカワラケにトウシンを入れ、アンドンや神仏の灯明によく用いた。石油も以前はヒョウソクなどで裸火のまま、後にはランプを用いて灯火としたが、現在は一般的な燃料として幅広く利用されている。灯火用には松なども利用された。

④ 火鉢類

雪国の冬は寒く湿度が高いので、暖房用具は重要な役割を持つが、中でも火鉢はその最たるものであった。和風の家屋構造とかつての燃料からいって、室内での焚火はイロリに限られ、その他は炭火を取分けて配置するしかなかった。しかし、日常の生活で常時火鉢を使用するのは、いわゆる町場であり商家などであった。農家の場合は、イロリが唯一の暖房施設であり、火鉢を必要とするのは特別な場合で、大勢の人が集まる時などは、他家から借り集めて使うことも希ではなかった。

少し古い時代の農家などで用いた火鉢といえば、せいぜい「手あぶり」くらいで、それも土製の小鉢のようなものだったし、欠け鍋などの転用で間に合せていた。

ツジバンと呼ばれる、火鉢を横向きの小箱に入れたものは、昔、辻番所^{つじばんしよ}で用いたことからの名称で、同型のものが冬の手仕事などにも使われた。また同じ箱型でも上部に格子をつけて足温用として機織りの際に用いたり、機屋の仕事場用の箱火鉢などもあった。一般座敷用には木製・陶製・金属製のものがあり、室内装飾の一つとなった。ダイスと呼ぶ長火鉢は接客用で常置していた。



スミダワラ 3-ハ-98
33cm×30cm 高さ56cm
茅・藁縄 木炭格納用俵



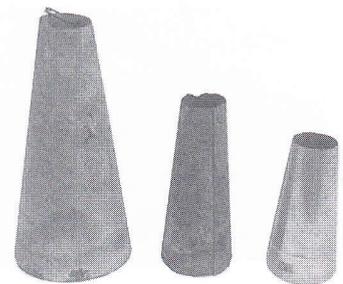
クマデ 3-ハ-109
全長64.8cm 475g
鉄・朴(柄) 木炭掻き出し用



スミバコ 3-ハ-102
34.2cm×21.7cm 箱高さ17.2cm
杉 炭入れ



スミイレ 3-ハ-105
径42.2cm×39.5cm 高さ41cm
フクベ 炭入れ



ヒオコシ 3-ハ-110
最大高さ33.3cm 口径6.6cm
ブリキ 炭火熾し用煙突



スミバコ 3-ハ-101
39.3cm×24.7cm 箱高さ17.7cm
杉 炭入れ



スミカゴ 3-ハ-106
24cm×24.5cm 箆高さ16cm
竹 炭入れ



ジュウノウ 3-ハ-111
全長53.5cm 1,080g
銅・木(柄) 炭等運び用具



ダイジョ 3-ハ-120
全長35.5cm 435g
鉄・アルミ 台付十能

炭火使用の補助用具

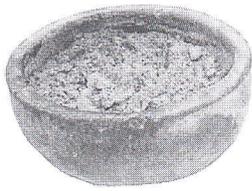
昭和30年代になって、石油やガスが自由に使えるようになるまでの暖房用燃料は、イロリなどで焚く薪以外は木炭だけであった。ただ、木炭といっても一般家庭で日常用いたのは、焚火で出た「焚き落し」^{あつぱい}の熱灰の混じったオキで、これを火箸で掻き集めて十能^{じゆのう}で掬って火鉢や炬燵へ移した。オキが余分にあると、火消壺に入れて、消炭^{けしすみ}にしておき、火熾しの時などにも使った。

スミ・カタズミで通称される木炭は、山の木を炭焼きの人たちが焼いたもので、これを買って求めた。この木炭は茅で編んだ炭俵に詰めて出荷され、大方の家で

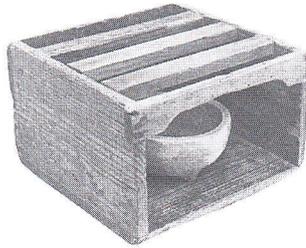
は俵のまま買った。日常用には炭俵から小出しして炭箱・炭箆などの専用の容器に移しておくが、座敷などに常備するものではないので持ち運び易く作られている。写真の熊手は炭の掻き出し用で、ある工場^{おこ}で用いていた。

火を熾すには、盛った炭に火種を乗せるが、その時上に円筒型の火熾し用の煙突を置くと早く熾きる。

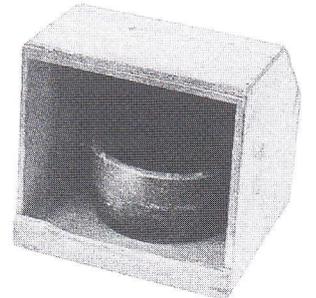
写真下段にダイジョというものがあるが、^{だいじゆのう}台十能の略語で、火を入れて運び、置敷きの部屋に置くような時のために工夫されたものである。同型のもので火皿の底に穴を開けたものがあるが、これは火熾し用にも用いた。



ヒバチ 3-ハー-123
口径28cm 高さ11cm
陶器(素焼) 火鉢



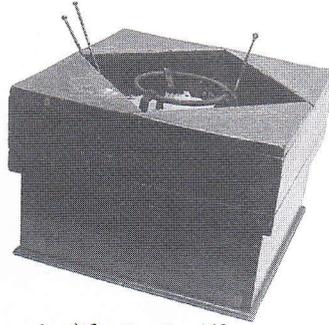
ヒバチバコ 3-ハー-126
箱 33.1cm×32.9cm 高さ20.9cm
火鉢 口径18cm 高さ8.5cm
杉・陶器(素焼) 箱アンカ



ヒバチバコ 3-ハー-124
箱 24.4×24cm 高さ23.9cm
火鉢 口径16.3×17.2cm
杉・陶器(素焼) 箱アンカ



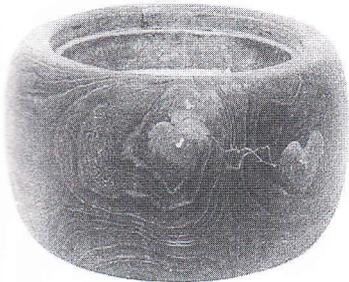
ヒバチ 3-ハー-128
枠29.5cm 高さ30.2cm
ケヤキ・鉄 箱型火鉢



ヒバチ 3-ハー-148
枠40.9cm×40.6cm 高さ22.5cm
杉・銅 箱型火鉢



ヒバチ 3-ハー-152
口径45cm×38.5cm 高さ25.6cm
自然木・銅 刳抜き火鉢



ヒバチ 3-ハー-150
口径38.6cm 高さ21.6cm
桐・銅 刳抜き火鉢



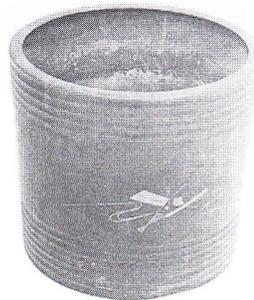
ヒバチ 3-ハー-155
口径50.6cm 高さ33.7cm
陶器 座敷暖房用



ヒバチ 3-ハー-159
口径41cm 高さ28cm
陶器 座敷暖房用



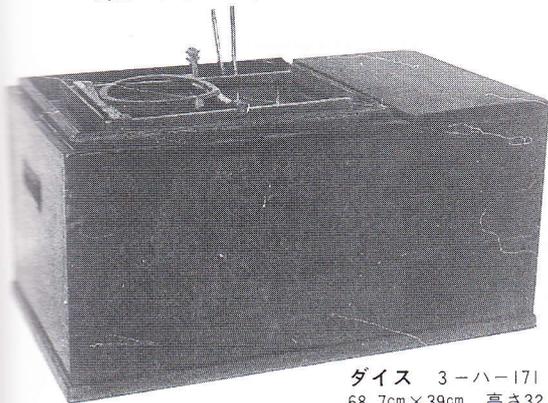
ヒバチ 3-ハー-161
口径16.7cm 高さ18.7cm
陶器 手あぶり・煙火盆用



ヒバチ 3-ハー-164
口径25cm 高さ22.4cm
ジュラルミン 手あぶり・暖房用



ヒバチ 3-ハー-163
口径44.2cm 高さ26.8cm
ジュラルミン 座敷暖房用



ダイス 3-ハー-171
68.7cm×39cm 高さ32.3cm
ケヤキ・銅 長火鉢



ゴトク 3-ハー-174
径21cm
鉄 火鉢付属用五徳



ハイナラシ 3-ハー-179
全長16.8cm 25g
鉄 火鉢付属用灰ならし



ヒバチジュウノウ 3-ハー-178
全長26.5cm 40g
鉄 火鉢付属用小型十能

せい
うな
。たも
のも
も上
り、
には
とな
。

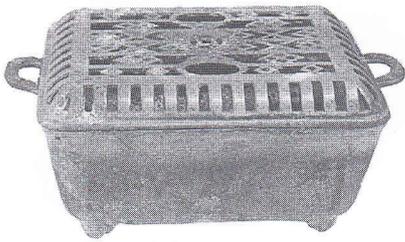
具

て炭箱・
どに常備
る。写真
いた。
その時上
じゅうのう
十能の略
うな時の
血の底に
用いた。

⑤ コタツ・アンカ類

アンカの古型のアンコウは、^{おんじやく}温石や湯タンポと同様に布に包んで寝床で用いたが、それが次第に大型になり、やがて置き炬燵と同じよう^{こたつ}に使われるようになった。二段式のアンカは、布団との間に空間を作って火気の危険を防ぐ工夫がされた。当地方の炬燵はいわゆるホリゴタツで、かつての住居は土間が普通であったから、室内の床地面に四角く穴を掘り、そこに灰を入れて火をとる。その上に四角に枠組みしたコタツヤグラを置き、炬燵布団を掛けてこの周りに座る。足を火の上に突出すので、

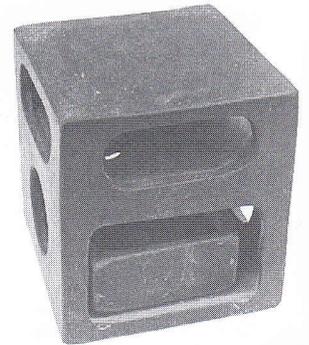
^{やけど}火傷防止に金網（コタツアミ）を掛けるようになった。二階など板敷の場合は、土を掘る代わりにコタツノオトシという火箱を床に開けた穴に吊すように取りつけて用いた。戦後、イロリを廃止するようになると、大型で深く掘込み、腰掛式に作った炬燵が流行するようになった。オカゴタツは、ホリゴタツに対して火鉢にコタツヤグラを掛けて仮設したものを言い、オキゴタツや前記の大型アンカと同系の移動型とも言える。また、炬燵を卓子として使うためのコタツパンや、布団保護に下掛布、敷物の縁の傷みを防ぐ炬燵敷などの補助具が工夫された。



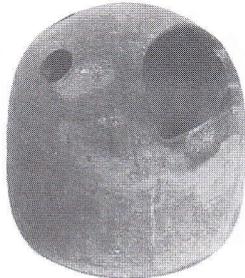
アシダンロ 3-ハ-180
30.5cm×20cm 高さ13.2cm
ジュラルミン 足温器



アンカ 3-ハ-188
長さ22.5cm 幅19.5cm 高さ19.8cm
陶器 アンカ



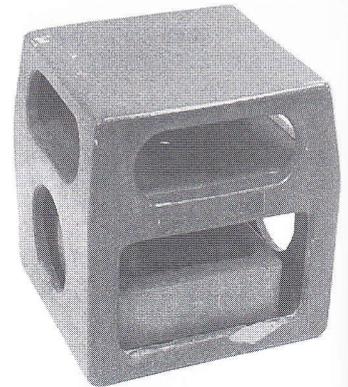
アンカゴタツ 3-ハ-195
28.5cm×28.3cm 高さ32cm
陶器 炬燵型アンカ



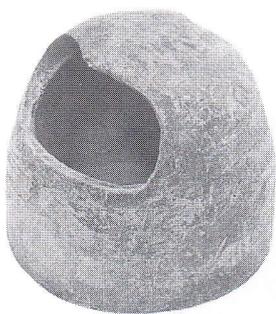
アンコウ 3-ハ-187
径15.5cm 高さ14.7cm
土製 丸型アンカ



アンカ 3-ハ-192
20.5cm×20.5cm 高さ14.5cm
土製 アンカ



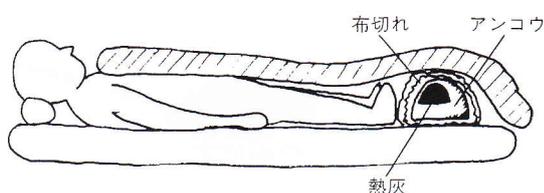
アンカゴタツ 3-ハ-193
26.8cm×26.5cm 高さ32cm
陶器 炬燵型アンカ



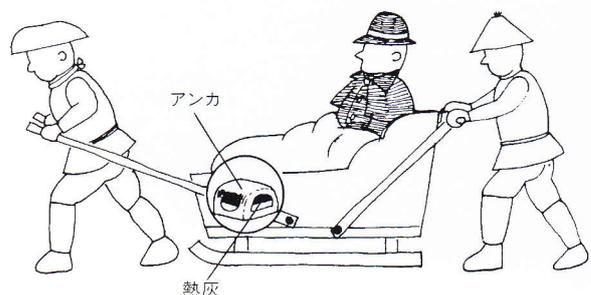
アンコウ 3-ハ-182
径17.9cm 高さ15.3cm
土製 丸型アンカ

コタツ・アンカのいろいろ

アンコウ 藁灰を入れたアンコウにイロリの熱灰を入れ、布切れで包んで布団の中に入れる。



アンカ アンコウと同様に使ったが、客ゾリの乗客の足元にも置いて、毛布をかけて採暖用に使った。

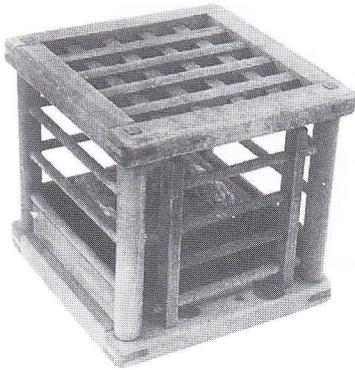


灰の利用

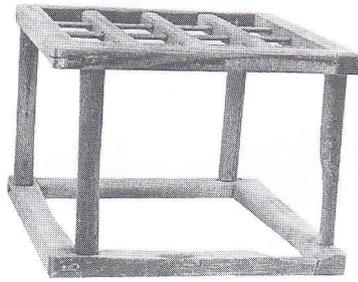
雪国の冬の暮らしでは、終日焚火が絶えることはない。薪は沢山消費されるが、これにより焚き落した灰が残る。この灰が農家にとっては貴重な資源であった。灰は古くから、暮らしの中で実に多様に使われたのである。灰は、①まず農家にとっては大切なカリ肥料であった。②イロリの熱灰に、そのまま食品を入れて焙った。③また、この熱灰をアンカなどに入れて熱源にした。④火鉢・アンカ・炬燵などに火を取る時の火受けにした。⑤木の実・野草などを食品とするときのアク抜きに用いた。⑥草木皮などの繊維の精製に灰汁で煮る。⑦紙漉きのカミソも

同様にこれで煮る。⑦染物の媒染剤にも用いた。⑧灰汁をとって洗濯に使い、食器もこれで煮沸して洗った。⑨コンニャク作りの際、凝固剤として用いた。⑩民間信仰的には、小正月のサイノカミ焼きの灰を顔や手足に塗ったり、雪玉に混ぜて火除にしたり、塩を混ぜてなめて厄神除けなどにした。⑩寒中に道が凍ると撒いて滑り止めとし、⑪春先には雪面に灰を撒いて消雪を促した。

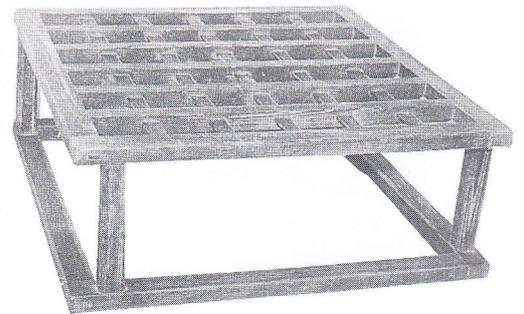
農家では、毎日、取溜めて保存したが、そのための灰小屋を設けている家も少なくなかった。アク抜きなどに使う灰は純度が要求されるので、焚物にも気を配った。



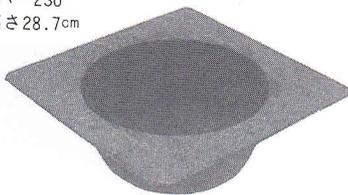
オカゴタツ 3-ハ-230
30.5cm×30.5cm 高さ28.7cm
朴 置炬燵



コタツヤグラ 3-ハ-201
43.5cm×43.5cm 高さ32cm
朴 切炬燵用



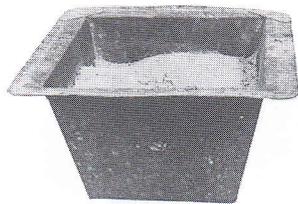
コタツヤグラ 3-ハ-211
90.6cm×90.1cm 高さ34cm
杉 切炬燵用



コタツノオトシ 3-ハ-217
39.3cm×39.2cm 高さ16.3cm
鉄 切炬燵用火鉢



コタツアミ 3-ハ-226
32cm×31.5cm 高さ9.1cm
鉄 防火用火覆い



コタツノオトシ 3-ハ-215
38.4cm×38cm 高さ20cm
トタン 切炬燵用火鉢

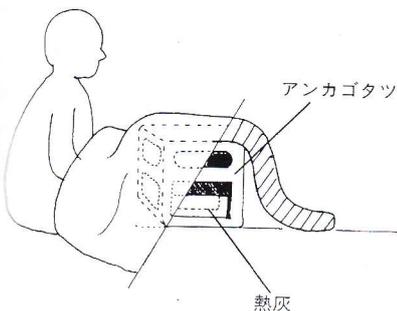


コタツアミ 3-ハ-225
33.7cm×31.5cm 高さ10cm
鉄 防火用火覆い

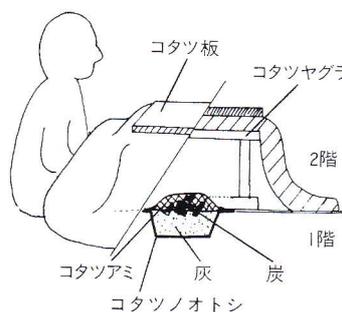


コタツアミ 3-ハ-229
64.5cm×64.5cm 高さ8cm
鉄 防火用火覆い

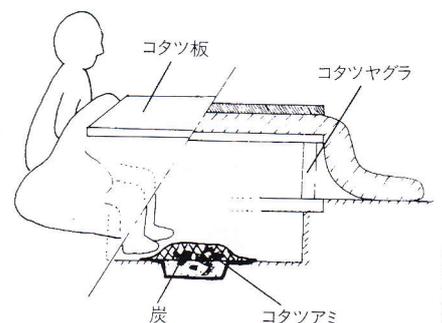
アンカゴタツ アンカやオキゴタツとしても使われる兼用型で、持ち運びのできる移動型の炬燵。

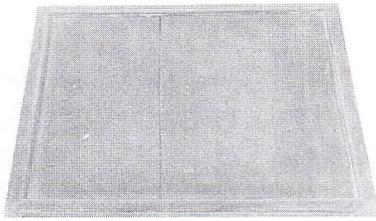


オシゴタツ 床張りや二階などの板敷の所に穴を明け、コタツノオトシをとりつけた固定式の炬燵。

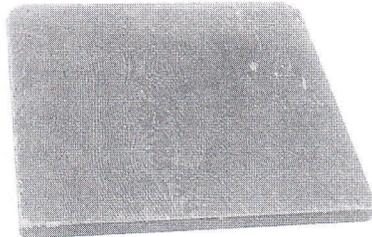


ホリゴタツ 土間住まいのころは、土間の地面を掘込んで作ったが、後にはジロを転用したり、床を切って、足がおろせる固定式のものを作った。

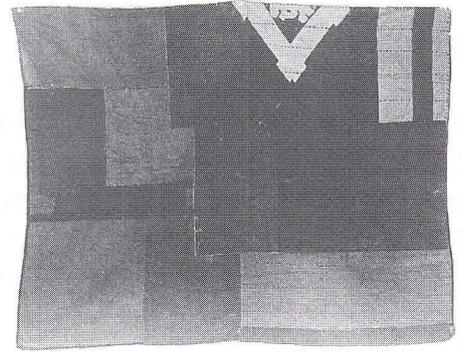




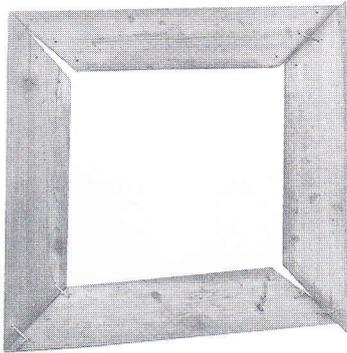
コタツパン 3-ハ-242
54.1cm×54.1cm 厚さ1.6cm
木 炬燵の上に置く板



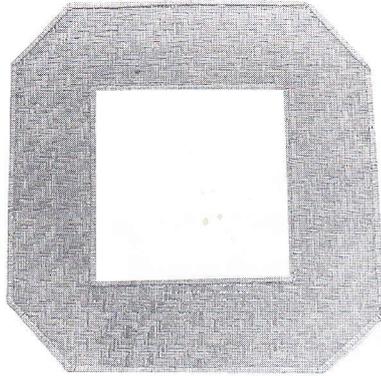
コタツパン 3-ハ-241
46.5cm×46.2cm 厚さ2.7cm
木 炬燵の上に置く板



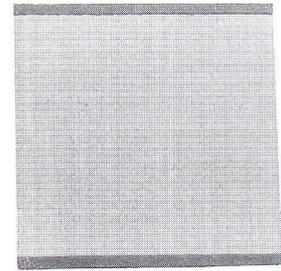
シタガケ 3-ハ-235
110cm×83.5cm
木綿 炬燵布団用下掛



コタツジキ 3-ハ-221
72cm×72.5cm
杉 炬燵へり敷物



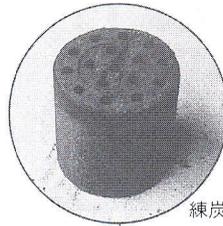
コタツジキ 3-ハ-222
86.5cm×87.5cm
籐 炬燵へり敷物



コタツタタミ 3-ハ-223
60cm×60cm 厚さ5cm
藁・イグサ 切炬燵はめ込み用



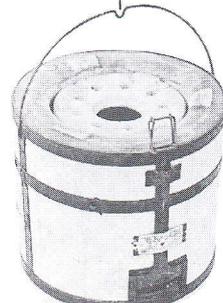
豆炭



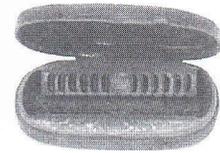
練炭



マメタンアンカ 3-ハ-251
19cm×15cm 高さ10.2cm
ファイバーケース・石綿・金具
豆炭利用アンカ



レンタンコンロ 3-ハ-245
径24cm 高さ25.5cm
陶器(素焼)・金具 深炬燵用練炭コンロ



カイロ 3-ハ-252
11.5cm×6.4cm 厚さ2cm 64g
金属 携帯用保温具



カイロ 3-ハ-255
10cm×6.8cm 厚さ1.5cm 55g
金属 携帯用保温具

賈い風呂について

風呂のことを単に「湯」といい、風呂桶をスイフロオケといった。昭和のはじめころまで、風呂桶はどこの家にもあるというものでなかったし、たとえあったにしても薪が貴重だったから毎日焚くことはできなかった。

賈い風呂は、そんな状況の中で工夫された相互扶助的な習俗であった。ある家で、今晚風呂を沸かすとすると、「湯の使い」を走らせて近隣の家に知らせる。これは専ら子供の役目で、「湯入りに来て下さい」と戸ごとに触れて回る。時にはコシキなどを使った伝言板に書き、家の前の雪道に立てて知らせることもあった。

夕食が済んだころ、三々五々近所の人たちが湯に入りやってくる。老若男女、一家をあげてくる家もあるから、たちまち超満員となる。湯宿の家では火を気前よく焚き、お茶や豆炒りを出してもてなす。大体は、来た順番に入浴するので待ち時間も長い。入れかわり来る人たちが四方山ばなしに花を咲かすから、さながら式亭三馬の『浮世風呂』のようで、作柄のことから世間ばなし、子供たちは昔話を語ってもらって楽しむ。

湯宿は期せずして特設された社交の場であり、情報交換の場ともなって、お互いの絆を確かめることもできた。

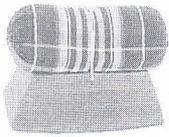
⑤ 寝具類

当地方の一般民家、特にその主体である農家は、ほとんどが茅葺であり、二階建の家は希だったので家の間数も少ない。したがって家族みんなの寝部屋を用意することは困難で、専用の寝間は老人や主人に限られていた。老人の寝室は座敷の一部を仕切って設えたものが多く、そこはオオベヤなどといった。他に若手夫婦がいれば、中門に一部屋を設えた。さらに若い長男が嫁を迎えると、舌間の一隅を茅葺で囲って仮の寝部屋とすることもあり、それをスガコイと呼んだという。

オオベヤは、昔の寝部屋の標準型のようなものだが、

間口一間・奥行一間半くらいで、その入口近くを一尺幅くらいの厚板で区切り、箱のようになった所を寝床とした。当時は大てい土間造りなので、そこにワラシビを厚く敷きつめ、その上にムシロカゴザが敷布を敷いて寝た。その後、板張の床になり、綿入敷布団を使うようになっても、布袋にシビを入れたワラプトンを下に敷いた。

敷布は、ネシキブイトウという古布を継ぎ合せたものが普通で、昭和30年代まで使い続けていた。夏場は布でなくゴザかコモであったが、単にネシキといった。掛布団は次ページのヨオギが年中使われていた。



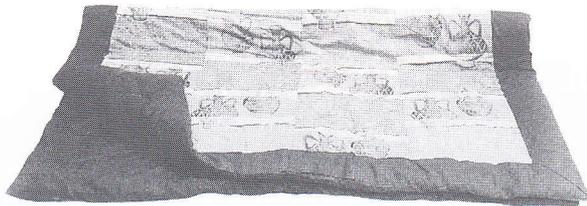
ハコマクラ 3-ハ-312
長さ22.5cm 高さ17.5cm
木綿・桐 女性用(木箱付)



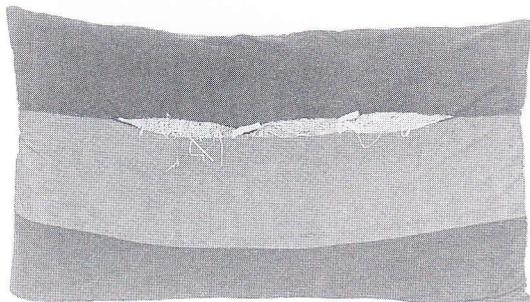
マクラ 3-ハ-311
長さ46cm 高さ22cm
木綿・ソバガラ



カタプトン 3-ハ-308
102cm×30cm 厚さ2.2cm 393g
木綿 肩保温用小布団



カケプトン 3-ハ-305
191cm×150cm 厚さ3cm 4,490g
木綿 綿入掛布団



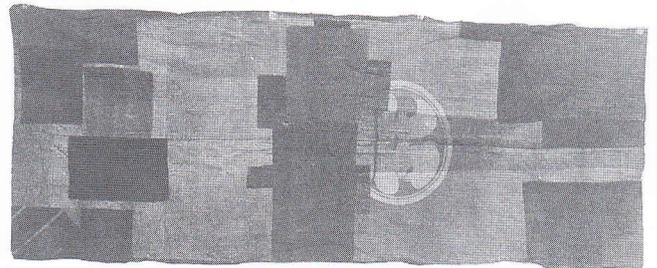
ワラプトン 3-ハ-260
170cm×99.5cm 厚さ18.5cm 6,500g
木綿・ワラシビ 薬入敷布団



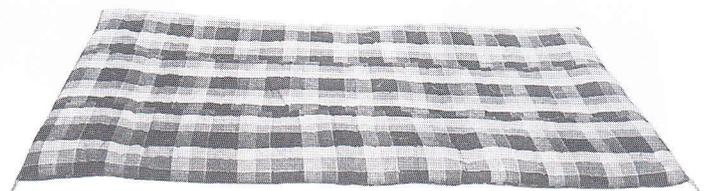
マクラビヨウプ 3-ハ-313
高さ69.6cm 幅87.8cm×2枚
木・和紙 半屏風



モウフ 3-ハ-277
180cm×138cm 1,420g
羊毛 下掛



ネシキブイトウ 3-ハ-267
166cm×65cm 530g
木綿 継布敷布



シキプトン 3-ハ-265
186cm×96cm 厚さ6.1cm 5,000g
木綿 綿入敷布団

入り
るか
よく
た順
人た
三馬
なし、

情報交
できた。

ヨオギについて

ヨオギは夜着・カイマキのことで、広袖の長着に分厚く綿を入れた掛布団である。いつごろから当地で一般に使われはじめたのか不明だが、布・綿ともに大量に必要なので他の夜具類と不釣合いで不思議な気がする。

しかし、綿については、オクソというカラムシ繊維の屑をウチワタにして代用できたから一応納得できる。それにしても非常な量が必要なわけで、越後縮で消費したカラムシの残滓だけでは賄いきれないように思う。

このオクソ入りのヨオギは、極めて重く固いもので、その上保温性がない。ある老婆は、「そのころは重たけれ

ば、暖かだと思っていたが、重くて息ができないくらいだった。」と言っていたが、その通りであった。現在残っているヨオギの布団皮は、ほとんどが夜具地として織られたものであり、中には背に大きく家紋を染抜いたものや、裾模様風に染めたものもある。こうしたことからすれば、商家や村の旧家などで客人の接待用に整えたものが、明治末期ごろから、綿布の流通とともに一般に普及したように思われる。

真夏は別として、ほとんど年中、家族みんながこれを用いていたのも、そのためであったように思われる。



ヨオギ 3-ハ-281
長さ170.5cm ゆき80.3cm 10kg
木綿 綿入袖付掛布団



ヨオギ 3-ハ-282
長さ201cm ゆき80cm 10kg
木綿 綿入袖付掛布団



ヨオギ 3-ハ-290
長さ181cm ゆき80cm 9,000g
木綿 綿入袖付掛布団



ヨオギ 3-ハ-292
長さ171cm ゆき73.2cm 7,500g
木綿 綿入袖付掛布団



ヨオギ 3-ハ-296
長さ171cm ゆき82.5cm 9,000g
木綿 綿入袖付掛布団



ヨオギ 3-ハ-299
長さ171.5cm ゆき80.6cm 11.5kg
木綿 綿入袖付掛布団

ニ その他住生活用具

① 灯火用具

明治年代になっても、住居内の明りは、イロリの焚火が唯一のものであった。写真のタンコロのような油火があっても、それは神仏の灯明用か、細かい手仕事や客人の接待用のものであった。

特に明りの必要な夜仕事などに際しては、松の根を細かく割ってヒデバチの上で焚いたが、これは雪の夜道に欠かせない明りに使ったタイマツから転じたものらしい。

イロリの火が光源とはいえ、薪の消費軽減も考えなくともてはならない。そこで工夫されたのがヌカ火である。糶

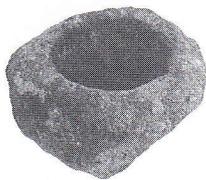
殻(ヌカ)を目の粗い箆^{かこ}などに入れて吊し、少しずつ落として、それが燃え上がる炎を明りとした。

アンドンにも油火を灯したが、これも特別なもので、一般に用いたのはロツカクであった。これらの場合、和紙が照明を助けるが、それを利用したのがアカリショウジであり、光源との間に立てて光を拡散照射させた。

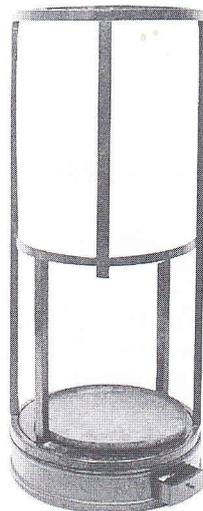
ロウソクは提灯^{ちようちん}類に使用したほか、燭台^{しよくだい}に立てて特別の時に用いた。家の中の暗がり^{おがら}を照らすのには芋殻^{おがら}で作ったトボシを用いた。クソーズ(石油)は、はじめヒョウソクで裸火使用したが、後にランプになった。



トボシ 3-ニ-2
長さ44.5cm 径(1本)×18本
カラムシの茎(芋ガラ) 手燭用



ヒデバチ 3-ニ-1
口径22.4cm×21.6cm 高さ11.5cm
石 灯火台



アンドン 3-ニ-10
高さ71cm 径28.3cm
木製・和紙 座敷用行燈



ロツカク 3-ニ-11
高さ49cm 径21.5cm 540g
杉・和紙 携帯用六角行燈



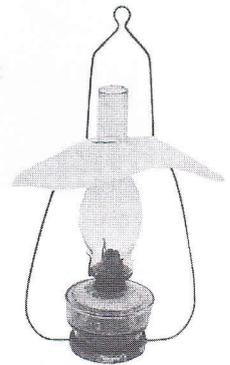
ヒョウソク 3-ニ-18
径6.3cm 高さ7.5cm
鉄・トタン板 灯火具(石油使用)



ヌカビ 3-ニ-4
径32cm×30cm 高さ32cm
アケビ蔓
糶殻入(アケビテゴ転用)



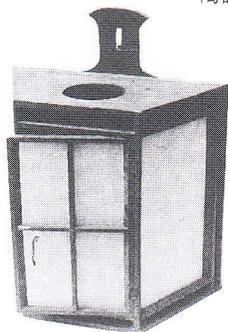
ショクダイ 3-ニ-14
高さ61.8cm
木・鉄 ロウソク立て



ランプ 3-ニ-19
高さ40.8cm
鉄・ガラス 吊りランプ(石油使用)

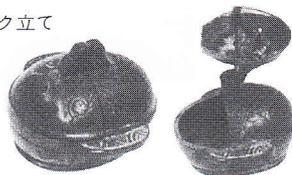
ヌカビ 3-ニ-3
全長144.2cm 箆径59cm×54cm
山竹 糶殻入(マメドオン転用)

タンコロ (Tankoro) 3-ニ-5
高さ5.3cm 口径5.4cm
陶器 灯火具(油使用)

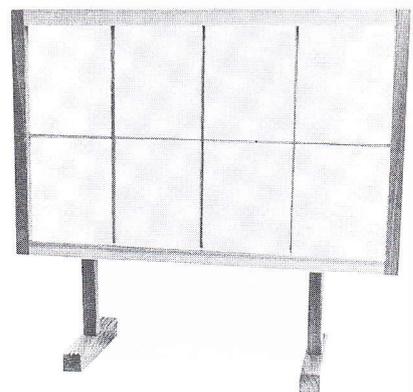


アンドン 3-ニ-9
高さ41.8cm 幅30.1cm 835g
杉・和紙 吊り・携帯用行燈

ショクダイ 3-ニ-12
高さ66.6cm
木・鉄 ロウソク立て

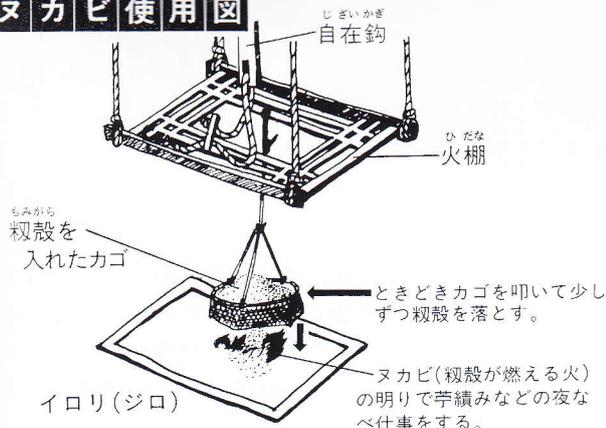


ショクダイ 3-ニ-17
高さ9.2cm 230g
青銅 折畳み式携帯用燭台



アカリショウジ 3-ニ-20
高さ75.8cm 幅83cm
杉・和紙 衝立型障子(光拡散用)

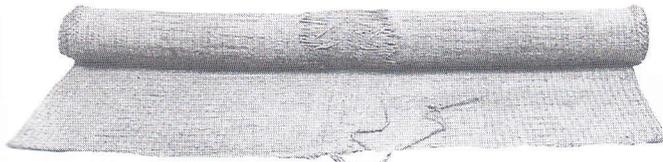
ヌカビ使用図



② 敷物・掃除用具

古い民家では、敷物はすべてムシロであり、床は土間が多かったため、下には藁や枯草・木の葉などを敷いた。床が板張になると夏はそのまの場合も多く、冬にはムシロを敷いた。畳が普及するのは遅く、それまでは客が来るとその場所だけにゴザを敷いた。ゴザは、チガヤ・スゲなどで自製したが、それらは換金物でもあった。座布団がどの家でも用いられるのは最近のことである。

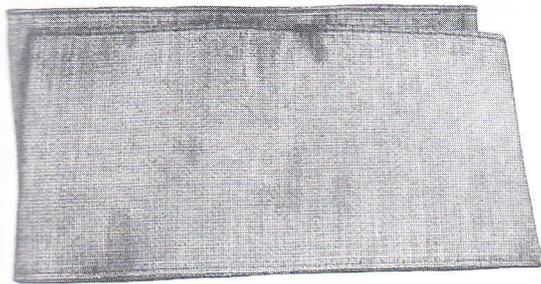
ムシロ敷で作業場となる屋内の掃除は、ホウキグサで作ったクサボウキを用い、塵取りは箕であった。



ムシロ 3-ニ-23
長さ270cm 幅178cm
藁 敷ムシロ



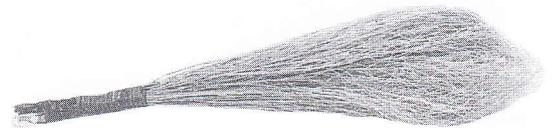
ゴンバキボウ 3-ニ-33
長さ76.5cm 34g(1本)
山竹 藁の塵叩き



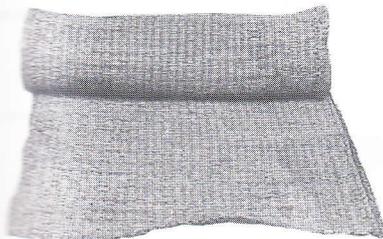
タタミ 3-ニ-30
174.5cm×87.3cm 厚さ3cm
藁・イグサ 屋内敷物



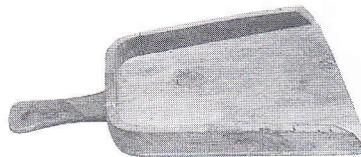
ハタキ 3-ニ-34
長さ77cm 40g
和紙・竹 塵払い



ホウキ 3-ニ-35
長さ81cm 150g
ホウキギ 箒



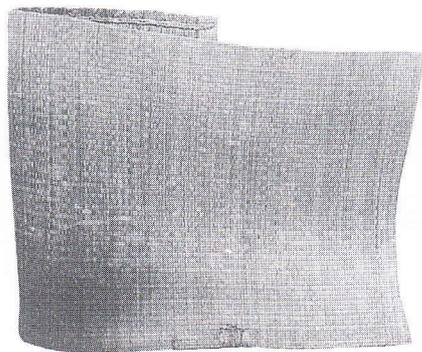
コムシロ 3-ニ-25
182cm×82cm
藁 敷コムシロ



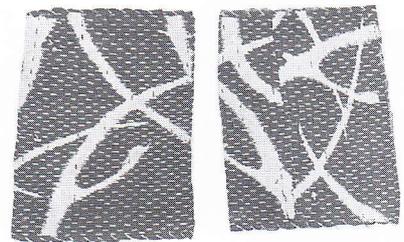
チリトリ 3-ニ-36
長さ38.2cm
杉 塵取り



ミ 3-ニ-37
長さ63cm 幅64cm
山竹・藤 塵取り用



ゴザ 3-ニ-26
174cm×88cm
藁 敷ゴザ



ゾウキン 3-ニ-38
33.5cm×25cm(1枚)
木綿 ふき掃除用

③ 井戸・その他用具

冬の室内用具については、たとえば、暖房・灯火用具のように夫々の項で紹介したが、ここではそれらに属されないものを掲げた。以下、写真の配列を追って記す。

○井戸関係用具／かつて一般の民家では流水を引入れて用いることが多く、雪のため不便を来すことも希ではなかった。その点井戸は、水温も高く有用であったが、不時の濁水に備えて、両者を併用する家も多かった。

○ツグラ／幼児を入れる藁籠。年間を通じて入れたが、冬季は保温と危険防止のため使用することが多かった。

○ネコツグラ／猫小屋用ツグラ。食品・衣料などを荒

らすネズミ駆除に、またペットとして猫は家族扱いされた。

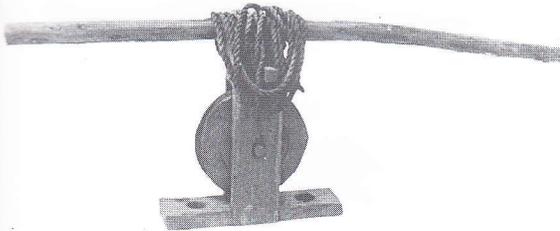
○ネズミオトシ／捕獲用具で各種あった。

○コモ・ハイガメ／玄関の地面が濡れた際の滑り止め

にコモを敷いたり、灰を撒いた。カメは灰の保存用。

○フミダイ・ハシゴ／狭い部屋に雑多なものを置くので、天井に吊したり屋根裏に格納した。そのために必要であり、特に梯子は長・短それぞれを用意していた。

○タンス・ナガモチ／衣類・布団などの格納用で、冬は特にネズミの害の防除に必要なものであった。



カッシャ 3-ニ-39
高さ45.5cm
杉 井戸用滑車



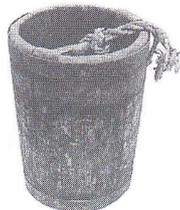
ツグラ 3-ニ-46
口径50cm 高さ26cm
藁 幼児を入れる籠



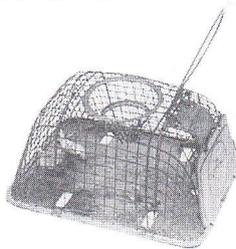
ツグラ 3-ニ-47
口径52.7cm 高さ26.9cm
藁 幼児を入れる籠



ツルベ 3-ニ-41
口径23.5cm 高さ31.2cm
杉 井戸用釣瓶



ツルベ 3-ニ-40
口径24.9cm 高さ33.8cm
杉 井戸用釣瓶



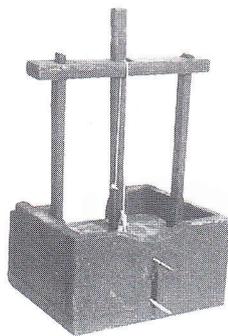
ネズミオトシ 3-ニ-54
高さ12.3cm
鉄 ねずみとり用具(金網型)



ネコツグラ 3-ニ-50
径35.5cm 高さ30cm
藁 家猫用猫小屋



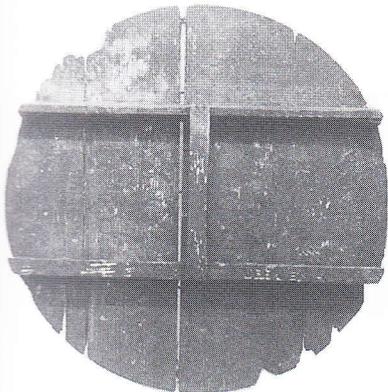
イカリ 3-ニ-44
長さ7.6cm
鉄 井戸用 落下物吊上げ用鉤



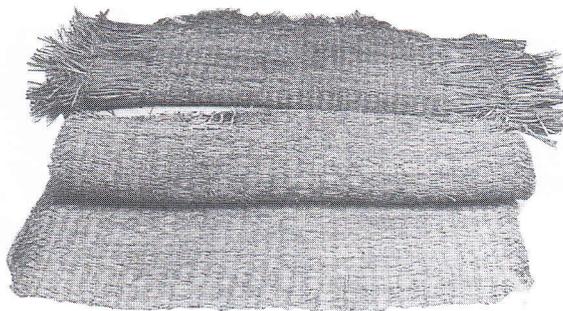
ネズミオトシ 3-ニ-52
高さ39cm
杉 ねずみとり用具(箱型)



トラバサミ 3-ニ-55
本体長さ21cm
鉄 ねずみとり用具



フタ 3-ニ-45
径53.5cm
杉 井戸蓋

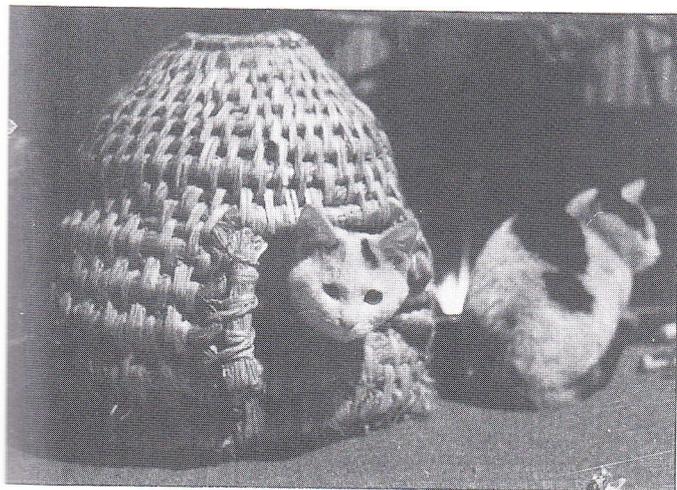


コモ 3-ニ-66
177cm×90cm
藁 玄関先の滑り止め用



ハイガメ 3-ニ-67
口径22.6cm 高さ31.7cm
陶器 取灰保存用

され
上め
くの
必要
冬



■ネコツグラに入った家猫



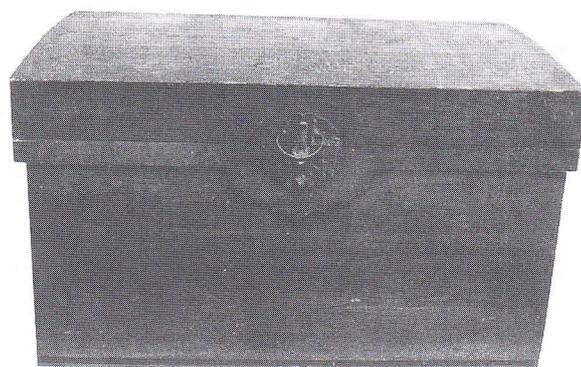
■ツグラに入った幼児



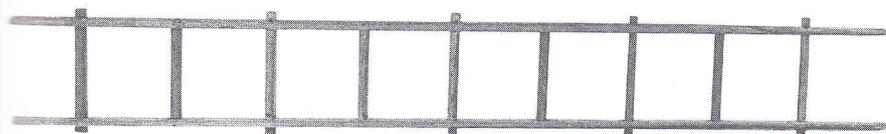
フミダイ 3-ニ-64
高さ35.3cm
杉 踏台



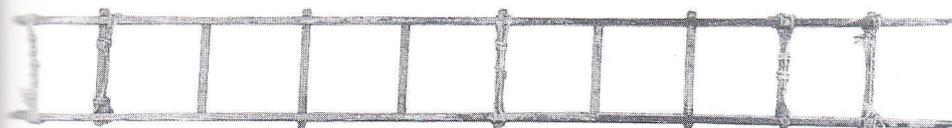
タンス 3-ニ-56
高さ97.5cm 幅84.7cm 奥行43.2cm
杉・桐 衣類格納用筆筒



ナガモチ 3-ニ-58
121.3cm×62.8cm 高さ70.7cm
桐 布団・衣類等格納箱



ハシゴ 3-ニ-62
長さ355cm 幅42.2cm
杉 二間梯子



ハシゴ 3-ニ-61
長さ369cm 幅47cm
杉 二間梯子



ハシゴ 3-ニ-59
長さ377.5cm 幅44cm
杉 二間梯子



ハシゴ 3-ニ-63
長さ223cm 幅41cm
杉 屋内用梯子

● 住生活用具品目一覧 〈計575点〉

イ、防風雪用具 ●雪囲い用具：ユキダナ・トバ・ユキダレ・ヨシズ・カコイムシロ・ジヅウサマノカコイ・オトシイタ・カコイギ・ハシゴ ●ナデ（屋根雪落下）止め用具：ナデドメ

ロ、除雪用具 ●雪掘り用具：コシキ・ナガエゴシキ・コドモコシキ・シャボリ・カクシャボリ ●雪処理用具：ユキドヨ・スノウダンプ・ハシゴ・マッコ・カナゴシキ・ユキキリノコギリ・トウグワ・ツルハシ・マサカリ・コエカゴ・ユキグシ

ハ、暖房用具 ●イロリ（ジロ）用具：カギドコ・ジザイカギ・ヒダナ・ロエン・ジロワク・キジリ・カマド・マキストーブ・マキキリダイ・ナタ ●点火・火焚き用具：ヒウチバコ・ヒウチガネ・ヒウチイシ・ツケギ・ツケギバコ・ヒバシ・ヒフキダケ・ケシツボ

●温石類：オンジャク・ユタンボ・ツツミスノ ●火鉢類：スミダワラ・スミバコ・スミイレ・スミカゴ・クマデ・ヒオコシ・ジュウノウ・ダイジョ・ヒバチ（素焼き）・ヒバチバコ・ヒバチ・ダイス・ヒバシ・ゴトク・ヒバチジュウノウ・ハイナラシ ●コタツ・アンカ類：アシダンロ・アンコウ・アンカ・アンカゴタツ・コタツヤグラ・コタツノオトシ・コタツワク・コタツジキ・コタツタタミ・コタツアミ・オカゴタツ・シタガケ・コタツブトン・コタツパン・レンタンコンロ・レンタンストーブ・レンタンオコシ・レンタンバサミ・マメタンアンカ・カイロ ●寝具類：ワラブトン・シキブトン・ネシキブイトウ・モウフ・ヨオギ・カケブトン・カタブトン・フトンカワ・マクラ・ハコマクラ・マクラビョウブ

ニ、その他住生活用具 ●灯火用具：ヒデバチ・トボシ・スカビ・タンコロ・カワラケ・アンドン・ロッカク・ショクダイ・ヒョウソク・ランプ・アカリショウジ ●敷物類：ムシロ・コムシロ・ゴザ・ハンゴザ・タタミ・ザブトン ●掃除用具：ゴンバキボウ・ハタキ・ホウキ・チリトリ・ミ・ゾウキン ●井戸用具：カッシャ・ツルベ・ツルベナワ・イカリ・フタ ●その他：ツグラ・ネコツグラ・ネズミオトシ・トラバサミ・タンス・ナガモチ・ハシゴ・フミダイ・コモ・ハイガメ